

城下町遺跡



2016年

日田市教育委員会





1次調査A区全景（西から）



2次調査区全景（北西から）



肥前系磁器皿集合写真



鍋島焼、肥前系磁器皿集合写真

序 文

この報告書は、当委員会が平成23・24年度に防災施設の整備工事に伴って実施した城下町遺跡の発掘調査の内容をまとめたものです。

城下町遺跡が所在する日田市豆田町は、近世から近代の建物が混在する伝統的な商家町の町並みを残していることが評価され、平成16年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

以来、建造物の保存修理を行う一方で、防災対策を講じてきました。

今回の調査は、このような防災対策の一環として行われる豆田の町づくり・防災の拠点施設整備や防火水槽設置箇所を対象に、豆田町における初めての本格的な発掘調査として実施しました。その結果、河原石を使用した建物の基礎である玉石列が発見され、建物構造を解明する上で重要な知見を得ることができました。さらに出土した皿から江戸時代の町年寄を務めた中村家の建物であったことがわかり、江戸時代終わり頃の絵図に描かれたものを裏付けるといふ大きな成果を挙げる事ができました。

また、これらの玉石列の大部分は保存され、今回整備された豆田まちづくり歴史交流館において、一部展示・公開を行っております。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、豆田町の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまご協力を賜りました関係者のみなさま、作業にご尽力いただきました作業員のみなさま、心より厚くお礼を申し上げます。

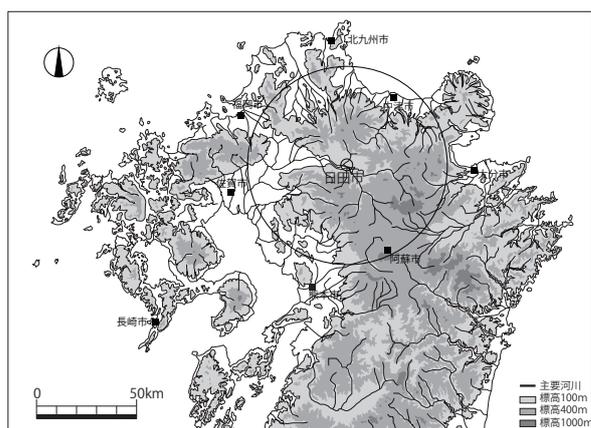
平成28年3月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、防災施設整備事業に先立ち、平成 23・24 年度に市教育委員会が実施した城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査現場での遺構実測は、有限会社九州文化財リサーチ、株式会社九州文化財総合研究所に一部を委託したほか、森山敬一郎・財津真弓・調査担当者が行った。
4. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測・製図・合成写真は、有限会社九州文化財リサーチ及び雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺構製図は担当者が行ったほか、高田美保・用松操（整理作業員）の協力を得た。
6. 本書に掲載した遺物写真は、雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
7. 挿図中の方位は、第 3 図は真北を示し、そのほかは磁北で表示している。
8. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
9. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 報告書の作成にあたり、上野淳也氏（別府大学准教授）に多くのご教示を得た。
11. 本書の執筆・編集は、若杉が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	4
III 調査の内容	6
(1) 調査の概要	6
(2) A区の遺構と遺物	9
1. 建物	9
2. 玉石列	12
3. カマド	12
4. 土坑	16
5. その他の遺物	22
(3) B区の遺構と遺物	33
(4) C区の遺構と遺物	33
IV 総括	35

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/5,000)	1	第18図 1・2号土坑出土遺物 実測図 (1/3・1/8)	20
第2図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)	5	第19図 土坑実測図 (2) (1/30)	21
第3図 調査区位置図 (1/500)	6	第20図 2・6号土坑出土遺物 実測図 (1/3・1/6)	23
第4図 A区遺構配置図 (1/100) 及び基本土層図 (1/40)	7～8	第21図 A区上層出土遺物 実測図 (1) (1/3)	24
第5図 1号建物実測図 (1/80)	10	第22図 A区上層出土遺物 実測図 (2) (1/3)	25
第6図 1号建物出土遺物実測図 (1/3・1/8)	11	第23図 A区中層出土遺物 実測図 (1/3・1/4)	25
第7図 2号建物実測図 (1/80)	12	第24図 A区下層出土遺物 実測図 (1) (1/3)	26
第8図 3号建物実測図 (1/80)	13	第25図 A区下層出土遺物 実測図 (2) (1/3・1/4)	27
第9図 4号建物実測図 (1/60)	13	第26図 A区最下層出土遺物 実測図 (1/3)	27
第10図 4号建物内便槽実測図 (1/30)	14	第27図 A区出土遺物 実測図 (1) (1/3)	28
第11図 3・4号建物出土遺物 実測図 (1/3・1/8)	14	第28図 A区出土遺物実測図 (2) (1/3・1/4・1/8)	29
第12図 1・2号玉石列実測図 (1/60)	15	第29図 A区出土遺物実測図 (3) (1/3)	30
第13図 カマド実測図 (1/30)	15		
第14図 土坑実測図 (1) (1/40)	16		
第15図 1号土坑出土遺物 実測図 (1) (1/3)	17		
第16図 1号土坑出土遺物 実測図 (2) (1/3・1/8)	18		
第17図 1号土坑出土遺物 実測図 (3) (1/3)	19		

第30図	A区出土瓦実測図(1)(1/3) ……30	第34図	B・C区基本土層実測図(1/40) ……34
第31図	A区出土瓦実測図(2)(1/3) ……31	第35図	B・C区出土遺物 実測図(1/3・1/4) ……34
第32図	A区その他の遺物 実測図(1/3) ……32	第36図	元治元年豆田町絵図 ……35
第33図	B・C区全体図(1/100) ……33		

図版目次

巻頭写真図版1	上 1次調査A区全景(西から) 下 2次調査全景(北西から)
巻頭写真図版2	上 肥前系磁器皿集合写真 下 鍋島焼・肥前系磁器皿集合写真
写真図版1	上 調査区周辺空中写真(南から) 下 調査区周辺空中写真(西から)
写真図版2	上 1次調査A区 垂直写真(上が西) 下 2次調査区垂直写真(上が西)
写真図版3	A区1～4号建物
写真図版4	A区2号玉石列、カマド 1～5号土坑
写真図版5	A区6号土坑、遺物出土状況 B区全景・池、C区全景
写真図版6～8	出土遺物

本文写真目次

写真1	1次調査現地説明会 …… 目次下
写真2	現地指導風景① …… 目次下
写真3	現地指導風景② …… 2
写真4	現地指導風景③ …… 2
写真5	2次調査現地説明会 …… 3
写真6	作業風景 …… 3
写真7	保存展示された玉石列 …… 3
写真8	A区土層① …… 6
写真9	A区土層② …… 6
写真10	B区基本土層 …… 34
写真11	C区基本土層 …… 34

表目次

第1表	出土遺物観察表(1) …… 36
第2表	出土遺物観察表(2) …… 37
第3表	出土遺物観察表(3) …… 38
第4表	出土遺物観察表(4) …… 39



写真1 1次調査現地説明会



写真2 現地指導風景①

1 調査の経過

本調査の原因となった「伝統的建造物群保存事業（防災事業）」（主管：文化財保護課町並み保存係）は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている日田市豆田町（日田市豆田町伝統的建造物群保存地区、以下「伝建地区」）の防災対策として、防火水槽（60t・2基）の設置や対象地内にある旧古賀医院の曳き移転・復元工事を行い、まちづくりの拠点となる施設（豆田まちづくり歴史交流館、以下交流館）の整備などを目的としたものである。

事業は平成22年度に計画され、その対象地（日田市大字豆田123-1）は、埋蔵文化財包蔵地である城下町遺跡の範囲内に含まれていること、防火水槽設置により大きく掘削を伴うため、予備調査が必要と判断した。

予備調査は、防火水槽2基の設置予定箇所を対象として、平成22年10月19～21日の間、実施した。2ヶ所のトレンチの内、御幸通りに面する1トレンチからは、建物の基礎と考えられる玉石列が確認され、その配置状況から2棟の建物が存在すると判断した。一方、住吉町通りに面する北側の2トレンチでは、一部近世の整地層が検出されたものの、ゴミ穴等、相当の攪乱を受けた状態が見受けられた。この結果を受け、1トレンチ部分については、本調査が必要、2トレンチ部分については、工事に当たり問題ないと判断した。なお、2トレンチを挟んで、東側の建物、西側の池の掘削予定地は、予備調査は実施せず、本調査時に調査をすることにした。

平成23年度の1次調査は、防火水槽の設置予定地、池予定地、集会所建設予定地をそれぞれA～C区として実施した。A区の調査においては、予備調査で確認された玉石列の展開を主眼に行った。その結果、玉石列は、予備調査で確認された列より西側に広がることを確認され、建物の基礎になる可能性が高まったため、調査指導者より、その全容を確認するようとの指導を受けた。西側に調査区を拡張した結果、検出された玉石列は建物基礎であることが判明した。さらに調査指導者より、豆田町での初の発掘調査例であり、基礎構造が把握できたその重要性が指摘され、保存をすべきとの指導を受けた。その後、協議の結果、防火水槽の設置位置を東側に移し、旧古賀医院の曳き移転後に再度調査することとなった。

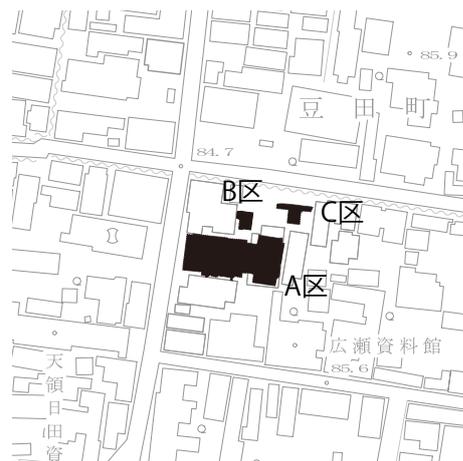
なお、B・C区の調査では、建物遺構などは確認されなかった。

平成24年度は、2次調査として、1次調査A区北側の約162㎡を対象として、旧古賀医院の建物の曳き移転後、発掘調査を開始した。その結果、1次調査で確認された3号建物の東側の礎石が確認され、その規模が判明したほか、新たに建物1棟と玉石列2基を確認した。この結果を受け、現地指導・内部協議の結果、防火水槽の設置位置については、遺構の損傷を最小限にとどめる位置とし、3号建物と1・2号玉石列を保存し、掘削部分における下層（約87㎡）の確認を実施した。

調査終了後、保存部分については、真砂土による埋め戻しを行い、保存措置を行った。しかし、防火水槽の設置工事中に3号建物の礎石にかかる部分にクラックが確認されたことから、工事中の危険性が指摘され、防火水槽の掘削範囲を広げる必要が生じたため、調査指導者への確認、内部で協議を経て、一部礎石の撤去を行い、工事の安全を確保した。

また、交流館の整備に関しては、礎石を保護するために基礎の嵩上げを行うなど工法の変更を行い、一部床をガラス張りにして、礎石を見学できるようにしている。

なお、本遺跡の調査経費については、平成23・24年度は伝統的建造物群保存事業（防災事業）、平成25年度以降の整理等作業及び報告書作成・印刷は、市内遺跡等調査事業において実施している。



第1図 調査地位置図 (1/5,000)

現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

平成 23 年度

5月16日 重機による表土除去開始
5月19日 作業員による遺構検出開始
6月2日 遺構掘り下げ開始
7月30日 岡山理科大学・江面教授現地指導
熊本大学・伊東教授、
大分県文化課・小林参事来訪
8月18日 調査区西側の拡張部分、
表土剥ぎ、遺構検出開始
8月24日 別府大学・豊田学長来訪
8月30日 大分県文化課・後藤副主幹来訪
9月5日 遺構実測開始
9月6日 熊本大学・伊東教授、九州大学・岸教授
大分県文化課後藤副主幹来訪
9月18日 別府大学・後藤名誉教授、豊田学長来訪
9月19日 岡山理科大学・江面教授来訪
9月22日 空中写真撮影実施
9月23日 現地説明会開催（122名）
9月28日 大分県文化課・後藤副主幹来訪
9月30日 器材整理・撤収し、作業終了
10月6～13日 真砂土による埋め戻し、調査完了

平成 24 年度

10月31日 重機による表土除去開始
11月2日 遺構掘り下げ開始
11月22日 遺構実測開始
12月3日 空中写真撮影実施
12月7日 大分県文化課・後藤副主幹現地指導
12月9日 現地説明会開催（23名）
12月12日 別府大学・後藤名誉教授現地指導
12月17日 岡山理科大学・江面教授現地指導
12月23日 別府大学・豊田学長現地指導
1月23日 器材撤収
1月28日 クラック発見、保存箇所の検討
2月8日 一部、玉石除去、器材撤収

また、平成 23～27 年度の調査組織は次のとおりである。（職名は当時）

平成 23 年度（発掘調査・整理事業）

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄（日田市教育長）
調査指導者 江面嗣人（岡山理科大学教授）
調査統括 財津隆之（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務 土居和幸（同課埋蔵文化財係長）華藤善紹（同課副主幹）
井上和泉（同課主査）
調査担当 若杉竜太（同課主査）上原翔平（同主事）
調査員 行時桂子・渡邊隆行（以上同課主査）
発掘作業員 河津定雄 五反田静子 後藤美知夫 財津真弓 高村三郎 森山敬一郎
整理事業員 伊藤一美 安元百合
来訪者 後藤宗俊（別府大学名誉教授）豊田寛三（別府大学学長）伊東龍一（熊本大学教授）
岸泰子（九州大学教授）小林昭彦（大分県教育庁文化課主幹）
後藤晃一（大分県教育庁文化課副主幹）

平成 24 年度（発掘調査・整理事業）

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄（日田市教育長）
調査指導者 後藤宗俊（別府大学教授）豊田寛三（別府大学学長）



写真 3 現地指導風景②



写真 4 現地指導風景③

江面嗣人（岡山理科大学教授）後藤晃一（大分県教育庁文化課副主幹）
 調査統括 財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）
 調査事務 土居和幸（同課埋蔵文化財係長）華藤善紹（同課副主幹）井上和泉（同課主査）
 調査担当 若杉竜太（同課主査）上原翔平（同主事）
 調査員 行時桂子・渡邊隆行（以上同課主査）
 発掘作業員 河津定雄 河津博文 加藤祐一 加藤寿子 合原建國美 五反田静子 小暮裕次 後藤美知夫
 財津真弓 竹本和則 津村小夜子 森山敬一郎
 整理作業員 伊藤一美 安元百合

平成 25 年度（整理作業）

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 合原多賀雄（日田市教育長）
 調査統括 財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）
 調査事務 園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長）武内貴彦（同課専門員）華藤善紹（同課副主幹）
 整理担当 若杉竜太（同課主査）
 調査員 行時桂子・渡邊隆行（以上同課主査）上原翔平（同課主任）
 整理作業員 伊藤一美 黒木千鶴子 高田美保 武石和美 安元百合

平成 26 年度（報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 合原多賀雄（日田市教育長／～平成 26 年 6 月）三笥眞治郎（同教育長／平成 26 年 7 月～）
 調査統括 財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長）
 調査事務 園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長）諫山温子（同課主事）
 整理担当 若杉竜太（同課主査）
 調査員 行時桂子・渡邊隆行（以上同課主査）上原翔平（同課主任）

平成 27 年度（報告書作成、印刷）

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 三笥眞治郎（日田市教育長）
 調査統括 柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課長）
 調査事務 園田恭一郎（同課主幹（総括）（～9 月）
 古賀信一（同課主幹（総括）10 月～）諫山温子（同課主任）
 調査担当 若杉竜太（同課主査）
 調査員 行時桂子・渡邊隆行（以上同課主査）上原翔平（同課主任）



写真 5 2 次調査現地説明会



写真 6 作業風景



写真 7 保存展示された玉石列

II 遺跡の位置と環境

今回の調査を行った城下町遺跡は、日田市豆田町を中心とする地域に所在する。日田市は、大分県の西部を占め、北部九州のほぼ中央に位置する。三隈川（筑後川）や花月川など多くの河川により形成された沖積地上に市街地の広がる日田盆地を中心として、まず標高 150 m 前後、沖積地から比高約 30～40 m を測る段丘が取り囲む。この段丘は約 9 万年前、新生代第 4 期更新世後期に発生した阿蘇 4 火砕流により古い日田盆地が埋め尽くされた後に河川浸食などにより形成された地形であるため、ほぼ全周にわたって高さが均一となっており、通称「原（はる）」と呼ばれ、「山田原」「吹上原」「辻原」など多くの段丘が存在する。この段丘の周囲は標高 200～400 m の耶馬溪火砕流の台地で囲まれ、さらその外側は標高 400～1,200 m 級の筑紫溶岩系安山岩からなる古期溶岩台地に囲まれ、市域の境となっている。このように四方を険しい山に囲まれた場所でありながら、古くは市内の地名が大宰府と豊後国府を結ぶ官道上の駅家として『豊後国風土記』・『延喜式』に記載されている。また、天領として日田が栄えた江戸時代には、西国筋郡代（代官所）を中心として筑後国高良山路・久留米城路・筑前国大宰府路・福岡城路・彦山路・小倉城路・豊前国宇佐宮路・中津城路・玖珠郡森宮路・直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれる旧国の主要な地域と日田を結ぶ道筋が幕府により整備され、内陸部の山間地にあって交通の要衝としての役割を果たしていた。

次に城下町遺跡を中心に周辺の主な遺跡を概観する。

日田盆地では旧石器～縄文時代の遺物が出土する遺跡は点在するものの、遺構が良好に残る遺跡はほとんど見られない。しかし次の弥生時代になると、盆地内での遺跡数が激増する。花月川を挟んで、城下町遺跡の北西の台地上にある吹上遺跡 (20) では、前期後葉以降の袋状貯蔵穴や竪穴住居跡のほか大陸系磨製石器（石斧・石砲丁等）が出土している。また、中期になると銅戈や鉄剣・南海産貝製腕輪などを副葬する大型成人用甕棺墓が複数営まれ、日田における特定集団墓の出現を見ることができる。この時代の遺跡は「原（はる）」と呼ばれる台地上に営まれることが多いが（佐寺原遺跡 (12) など）、台地上だけでなく、沖積地にも良好な状態で残されている。

弥生時代の後期末には吹上遺跡の北東の台地上、小迫辻原遺跡で (18) 環溝集落が出現し、古墳時代初頭には方形の環溝を備えた豪族居館へと発展するが、長続きはしない。その一方で一般集落は台地上から沖積微高地へ下りてくる傾向が見られる（一丁田遺跡 (4)）。古墳時代中期にはカマドや鍛冶技術など、新たな生活様式の流入と定着が看取でき、一丁田遺跡では鉄鋌が出土している。また、この時期に盆地内各所で古墳が造られるようになり、並行して台地崖面や独立丘陵などに一般用の横穴墓の造営が開始される。日田では後期になって朝日天神山古墳群などの前方後円墳が造られはじめるが、月隈山の横穴墓群 (3) もこの時期のものと考えられている。

古代の日田は、古墳時代からの在地の有力豪族である日下部氏が郡司として治めたと考えられ、小迫辻原遺跡では 8 世紀後半～9 世紀前半の掘立柱建物などの遺構とともに須恵器転用硯や「大領」銘土器の出土から、公的施設が存在および日田郡司・日下部氏との関連も指摘されている。そのほか、慈眼山遺跡では 8 世紀前半代の井戸内から「門」「林」銘土器が出土、また近隣の大波羅遺跡 (7) でも「山」「田」銘土器のほか方形掘り方の大型柱穴列などが確認されており、このあたりに中心施設の存在が考えられるようになった。なお花月川右岸の日田条里遺跡上手地区 (8) においては 10～11 世紀代の集落が見つかっており、古代末期に日下部氏に代わって台頭してきた大蔵氏に関連するものと指摘されている。

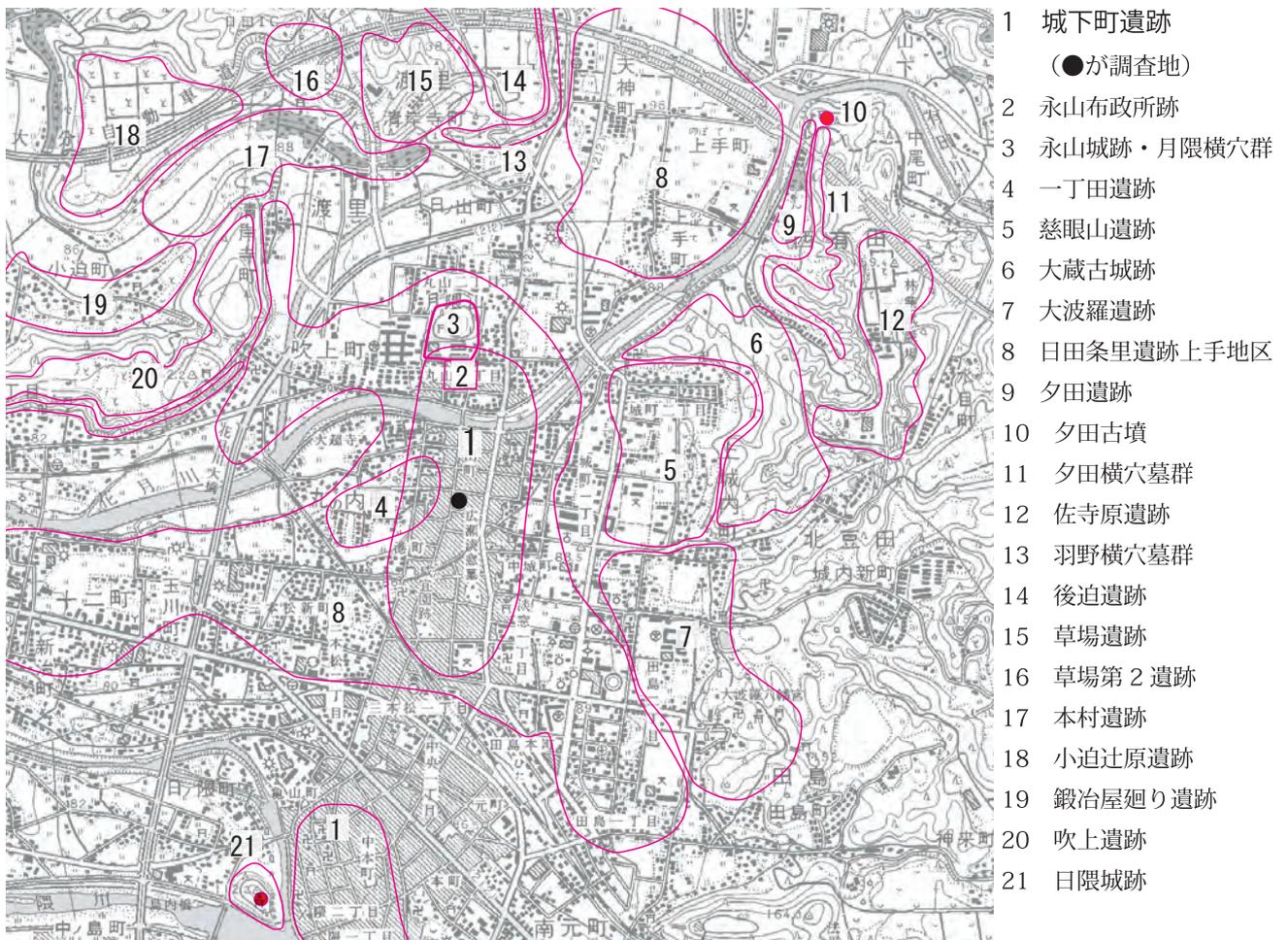
古代末から日田を治めた大蔵氏は後に鎌倉幕府の御家人となり、日田氏を称するようになる。15 世紀中頃の日田氏滅亡まで、慈眼山につくられた大蔵古城 (6) を居城とし、西豊後一帯を支配していた。当初は前代に引き継ぎ日田条里遺跡上手地区を中心的集落としていたようであるが、14 世紀以降は大蔵古城南側沖積地の慈眼山遺跡 (5) に中心が移ったようで、大規模な整地層の上に営まれた掘立柱建物などとともに青銅製の柄頭や青磁・

中国銭・瓦などが見つかっており、武士階級を中心とした有力層の集落であったことを示している。日田氏滅亡後は大友姓日田氏の支配下となり、引き続き慈眼山のふもとで集落が営まれている。また小迫辻原遺跡では12～16世紀の100棟以上の掘立柱建物や方形周溝遺構が確認されており、武家屋敷と推定されている。なお、大友姓日田氏の滅亡後の様相については、遺跡という視点からは不明な点が多い。この時期の日田盆地は大友氏が任命した八郡老による支配が行われるが、豊臣秀吉による大友氏取り潰しを受け、その支配は終焉する。

大友氏の文禄2(1593)年取り潰し後、日田は太閤蔵入地となり、日田の近世が幕を開ける。翌文禄3(1594)年には宮木長二郎が入部し、永山城(3)に先立って日隈山に日隈城(21)を築く。この時期の遺跡としては、永山城とその南に広がる豆田町を中心に、近年の調査例が増加している。永山城の南にあったとされる永山布政所跡(2)は島原の乱を受けて幕府が地方支配強化のために寛永16(1639)年に設置したもので、中央から代官が派遣され、この後間もなく永山城は政治的機能を失って廃城となる。18世紀後半には西国筋郡代へと昇格し、近世を通して日田および九州天領の政治的中心地であった。これまでに数回の確認調査が行われているものの具体的な遺構は未だ確認されていない。しかしながら廃棄土坑と見られる遺構から漆器や建築部材のほか「御役所」と記された木簡が出土している。

参考文献

若杉竜太他編『永山城跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第121集 / 市内遺跡発掘調査報告書16 日田市教育委員会 2016
ほか



第2図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

III 調査の内容

(1) 調査の概要 (第3図 写真8・9)

調査においては、前述したとおり、1次調査については、対象地をA・B・C区の3区に分け実施した。2次調査は、1次調査A区において確認された3号建物の広がりを確認する目的に東側に拡張して実施した。なお、以下の記述において、調査年次を分けて記述すると煩雑になるため、A～C区の調査区毎に記述を行うこととし、必要に応じて調査次数を記述する。

A区は、御幸通りに面した部分で、東西方向約32m、南北方向約15mを対象とし、調査面積は約412㎡（上層の面積）である。B区はA区の北側の南北方向約6m、東西方向約4mの約24㎡、C区はB区の東側にあり、T字形の調査区38㎡を対象として実施した。



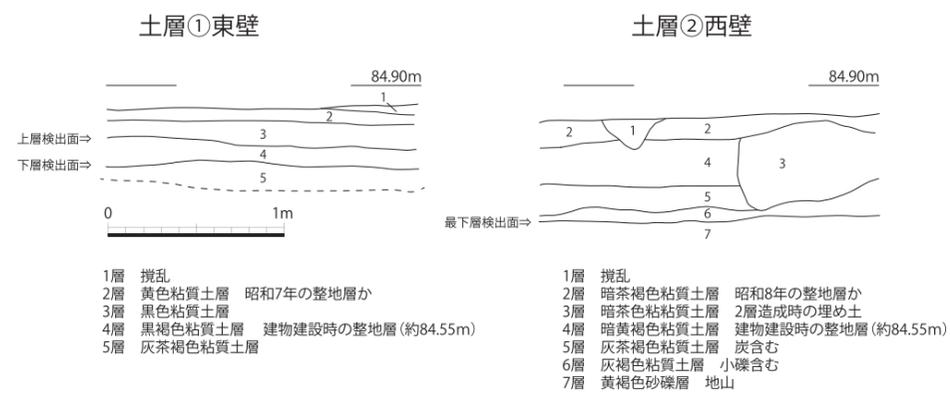
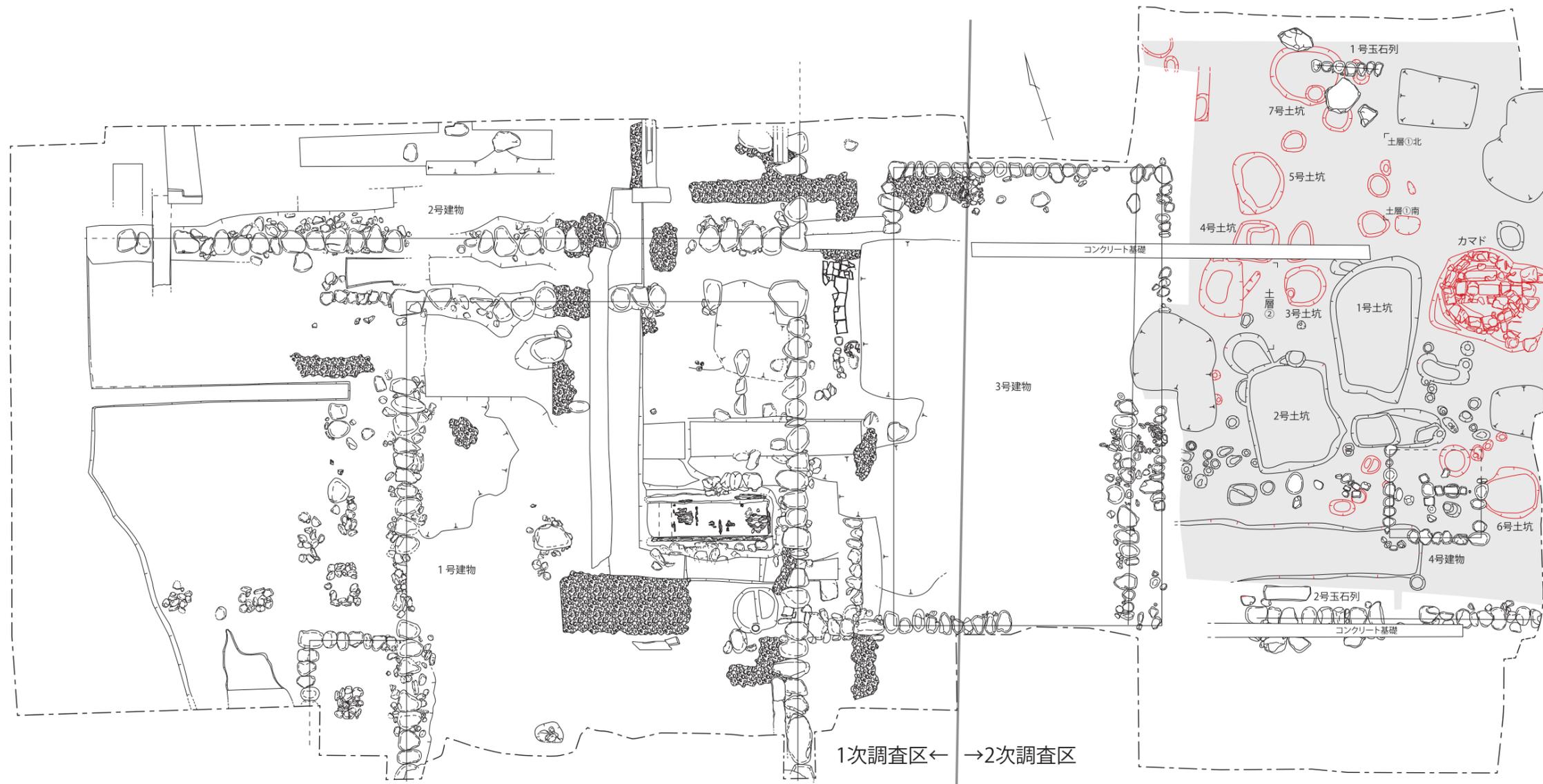
第3図 調査区位置図 (1/500)



写真8 A区土層①



写真9 A区土層②



- 1層 攪乱
- 2層 黄色粘質土層 昭和7年の整地層か
- 3層 黒色粘質土層
- 4層 黒褐色粘質土層 建物建設時の整地層(約84.55m)
- 5層 灰茶褐色粘質土層

- 1層 攪乱
- 2層 暗茶褐色粘質土層 昭和8年の整地層か
- 3層 暗茶色粘質土層 2層造成時の埋め土
- 4層 暗黄褐色粘質土層 建物建設時の整地層(約84.55m)
- 5層 灰茶褐色粘質土層 炭含む
- 6層 灰褐色粘質土層 小礫含む
- 7層 黄褐色砂礫層 地山

第4図 A区遺構配置図(1/100)及び基本土層図

第4図 A区遺構配置図(1/100)及び基本土層図(1/40)
 (アミ：下層・最下層の調査範囲、アミ部分の遺構の内、白抜き：上層、黒：下層、赤：最下層)

(2) A区の遺構と遺物(第4図 写真8・9)

A区の調査においては、現存している旧古賀医院が建設された昭和7年当時の整地層(2層)、その下層に2層造成時の埋め土(3層)が確認された。その下層の4層(黒褐色粘質土層、暗黄褐色粘質土層)が、今回確認された建物を建築する際に造成された整地層と判断される。その下層には炭や礫を含む層が堆積し、黄褐色の砂礫層(7層)が地山である。防火水槽設置により掘削が及ぶため調査した東側範囲の下層の遺構については、5層上面の84.3m前後から掘り込む遺構と7層の地山(84.1～84.2m)に掘り込む遺構が確認された。5層を掘り込む遺構については、後述する1・2号土坑がそれにあたるが、1・2号土坑から大量の陶磁器や瓦が出土しており、4層の造成時に伴うものである可能性がある。

確認された遺構は、上層において、建物4棟、玉石列2基、下層において土坑2基とピット、最下層でカマド1基、土坑5基と多数のピットが確認された。

1. 建物

今回、報告する建物4棟は全て玉石を基礎とする建物であり、調査区内において、4棟が確認された。

1号建物(第5・6図 図版3)

この建物は、調査区の中央よりやや西側で確認された。南側は調査区内では確認されなかったものの隣接地との境界に水路が走っていることから、調査区のすぐ外側に基礎があるものと想定される。また、南西側には方形を呈する張り出しが見られた。礎石は、一部後世の攪乱等により除去されている箇所があるものの、概ね20～30cmの河原石を隙間なく並べていたと想定される。その内、隅角にあたる部分には60～70cmのやや大ぶりの河原石を据えている。さらに礎石の周囲や間には、小振りな石を根石として配している。また、中央よりやや西寄りには南北方向に2個の東石及び東石の根石が4m間隔で配されている。

また、礎石の中には墨書番付をしたものがあり、東側の礎石には「十六」の文字、中央の東石にも文字は判然としないが、墨書があるのがわかる。

さらに、礎石は熱を受けているものがあることから、火災にあった建物の礎石を再利用した可能性がある。

規模はいずれも心々距離で、梁行(東西方向)約8m、桁行(南北方向)約10mを測る。また、南西側の張り出し部分は、東西方向約2mを測り、南北約1.2m分の礎石が残る。

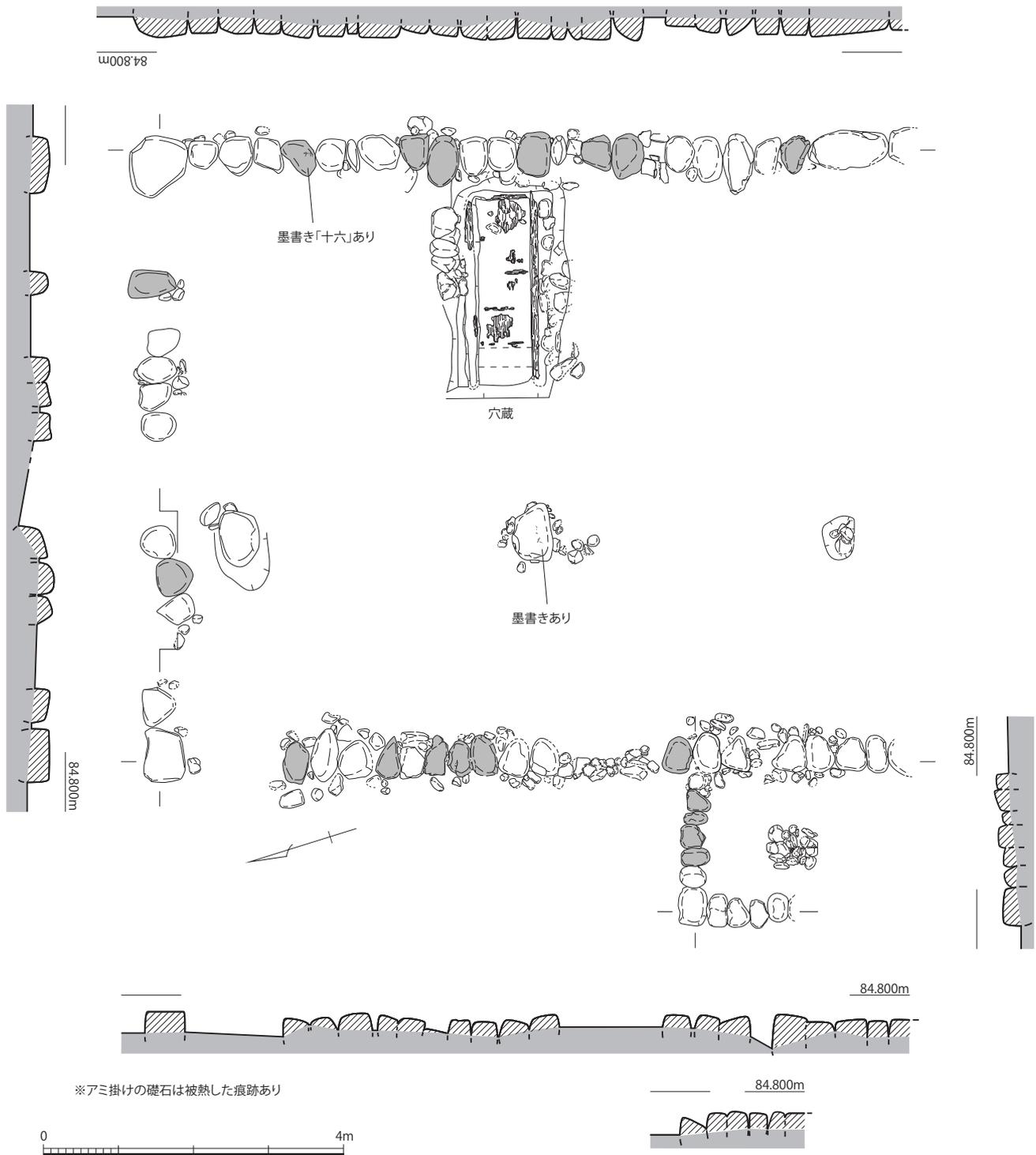
このほか、東側の中央付近には、穴蔵が確認された。平面形は長方形を呈し、枠に棒状、床に板状の木材を使用し、その外側には河原石を積み、構築されていた。規模は長軸約2.9m、短軸約1.2m、深さは40cmを測る。

出土した遺物は、陶磁器の碗・皿、須恵器坏身である。陶磁器の皿のうち、有田焼の皿の高台内側には「三丁目 中村」の墨書が見られ、焼き接ぎに出した際の記名と考えられる。

2号建物(第7図・図版3)

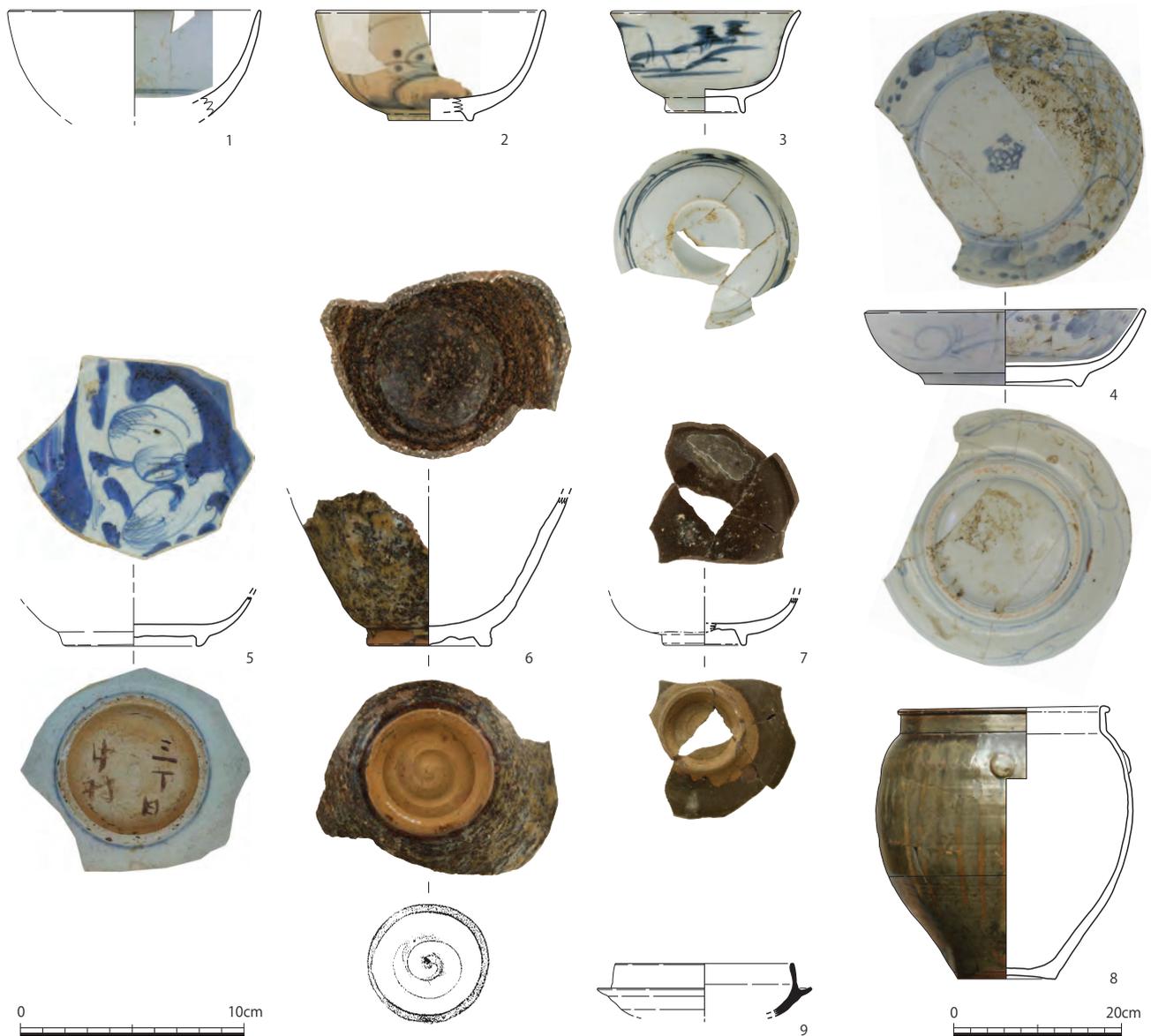
この建物は1号建物の北側で確認され、建物の南側と東側の一部が検出された。1号建物と約1mの間隔で接しており、通路状の空間があったと想定される。礎石は、一部攪乱を受け、玉石が存在しない部分もある。北側は調査区外へ広がると想定されるが、南側については、西端の基礎の玉石が建物の南西隅に当たるものか、判断はできなかった。

礎石は、一部後世の攪乱等により除去されている箇所があるものの、概ね20～30cmの河原石を隙間なく並べていたと想定される。また、礎石の周囲や間には、小振りな石を根石として配している点、熱を受けた礎石がある点など、これらの特徴は、1号建物と同様である。しかし、隅角にあたる礎石に大ぶりの河原石を据えていない点は異なる。また、東石が南側の礎石列から2mの位置に5.2mの間隔で2個確認された。



第5図 1号建物実測図 (1/80)

このほか、1号建物と同様に墨書番付をした礎石があり、東側の礎石には「十」の文字が書かれているのがわかる。礎石の残存状況から調査区内で確認された規模は、東側（南北方向）約2m、南側（東西方向）約14mである。建物の西側は、御幸通りや水路があるため、現状で確認されている規模と大きくは変わらないと考えられる。遺物は出土したものの、図化可能なものはなかった。



第6図 1号建物出土遺物実測図 (1/3、8のみ 1/8)

3号建物 (第8図・図版3)

この建物は、1号建物の東側で確認され、1次調査区と2次調査区に跨って検出された。北西隅と南東隅は攪乱を受け、玉石を失っているものの、その他の玉石の配置状況から、規模は把握することができる。

礎石は、20～30cm前後の河原石を利用しているが、1・2号建物に比べて、やや小ぶりな印象を受ける。東側については、礎石が2列確認されているが、増築した可能性が考えられる。また、内側の軸が外側の軸に比べ、ややずれていた。規模については、梁行(東西方向)き約4.8m、桁行(東西方向)約9.2m、外側の部分を含めると、梁行は約5.4mを測る。

遺物は肥前系の碗などが出土している。

4号建物 (第9・10図 図版3)

この建物は、調査区の北側で見つかった。1～3号建物に比べて小振りの玉石を用いている。北側と東側には

一部礎石が置かれていない部分があるが、建物内部東側には、土坑状の掘り込み及び甕を埋設していることから、2基の便槽をもつ便所と判断した。そのため、北側が入口となり、東・西・南側が壁であったと想定できる。なお、2基の便槽の間には、礎石が並べられており、2基の便所を仕切る壁の基礎と考えられる。

規模は、梁行（東西方向）約 1.8 m、桁行（南北方向）約 2.1 mを測る。

2基の便槽のうち、東側は木片が床面付近から出土したことから埋桶式と考えられ、西側は甕を据えた埋甕式である。埋桶式便槽は、平面形は楕円形を呈し、長軸約 1.2 m、幅約 1.0 m、深さ約 1.0 mを測る。埋甕式便槽は、直径約 1.2 m、深さ約 1.0 mの掘り方に甕を据え付けている。

遺物は肥前系の碗蓋などが出土している。なお、便槽に使用されていた甕は九州産である。

2. 玉石列

玉石列については、建物の礎石になるような展開が確認されなかったことから、その性格は判然としない部分もあるが、何らかの意図があり、並べられていると判断したことから、ここで記述する。

1号玉石列（第12図）

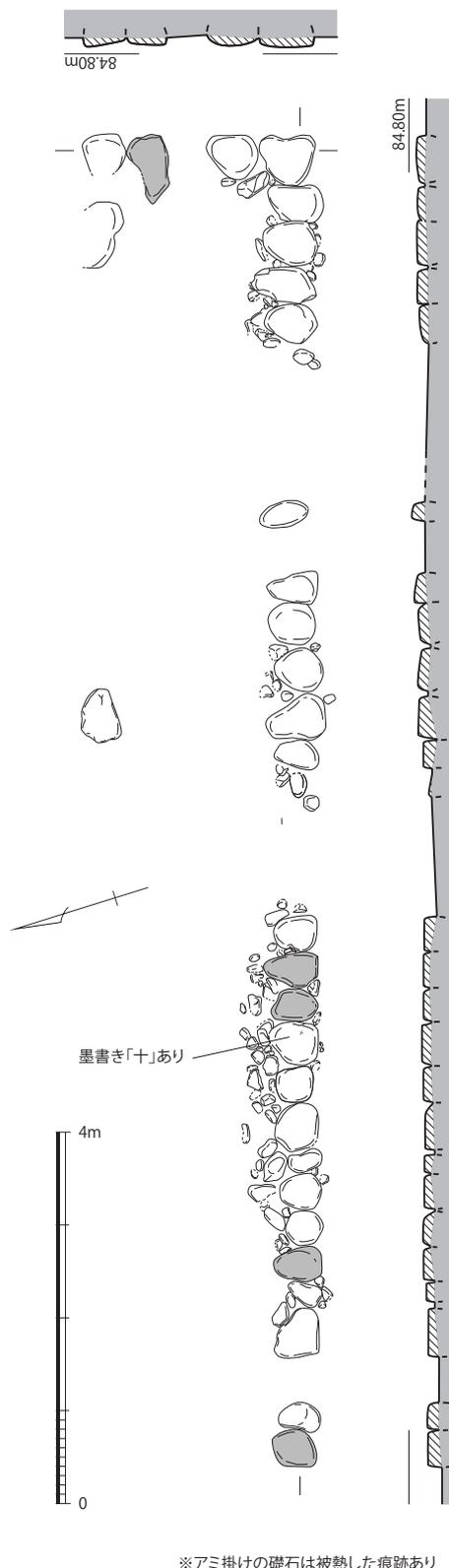
調査区の北東側で確認された。大きき約 20 cm前後の玉石を約 4 mにわたり、据えていた。

2号玉石列（第12図 図版4）

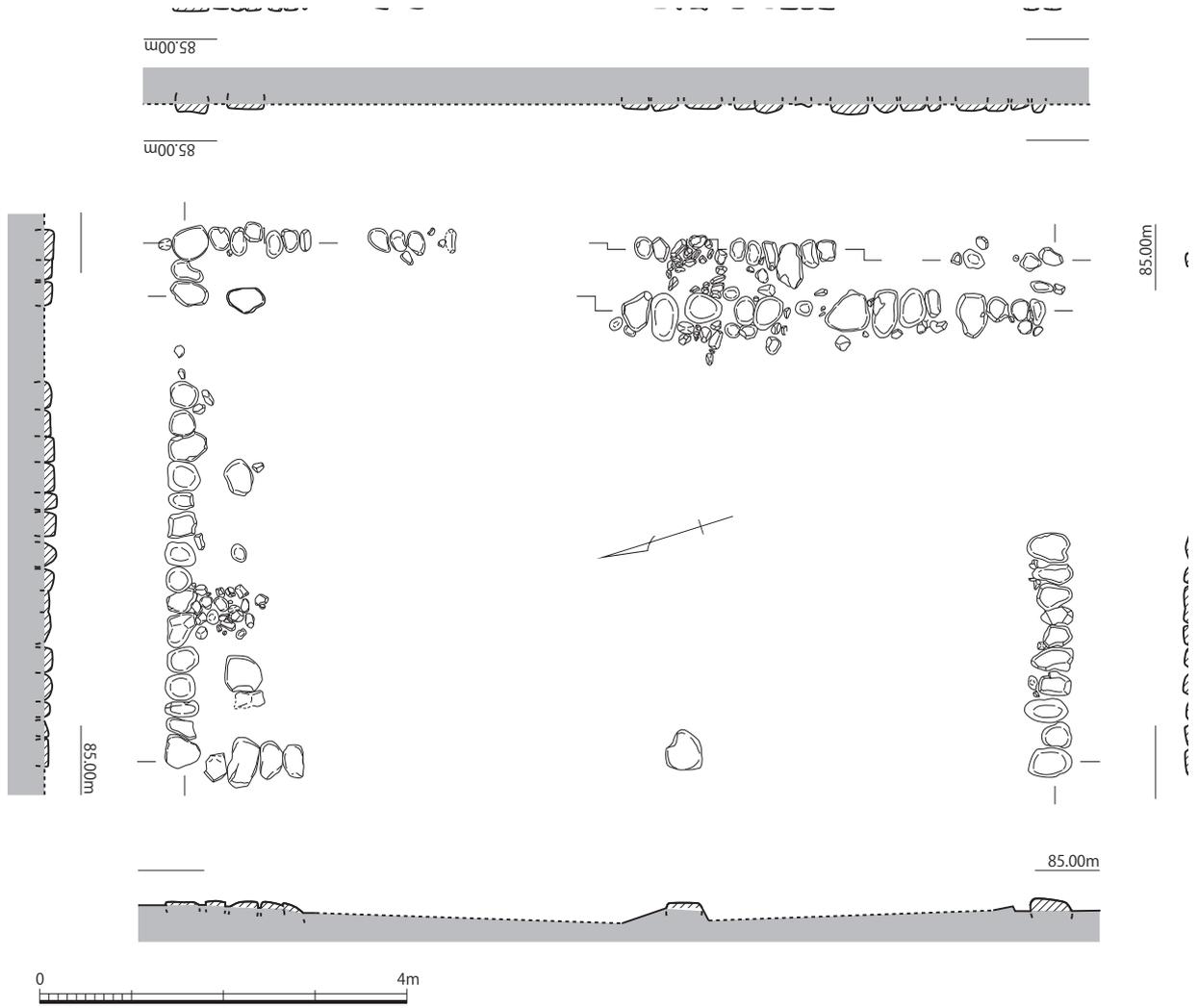
調査区の南東側で確認された。1号玉石列とやや大きめの約 30～40 cm前後の河原石を約 6.0 mにわたり、据えていた。なお、東半分については、玉石のレベル確認を失念したため、断面図がないことを記しておく。

3. カマド（第13図 図版4）

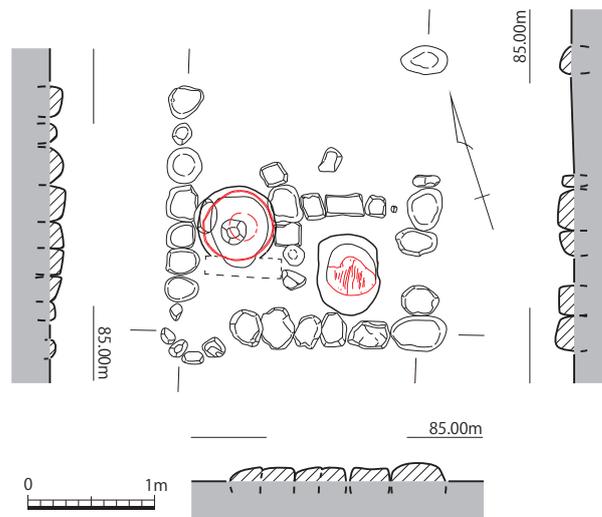
調査区の東壁際で確認された、最下層の遺構である。平面形は馬蹄形を呈し、焚き口は東側に設けるが、焚き口の端部は調査区外へ広がると考えられる。カマドの本体の構造は、凝灰岩製の切り石を3～4段、縦に積み、床面は同様の切り石を横置きに配置している。壁面には部分的に被熱した箇所が見受けられる。切り石の外側は、掘り方との間に粘土を充填しており、石材の固定や水漏れを防ぐ目的であったと考えられる。



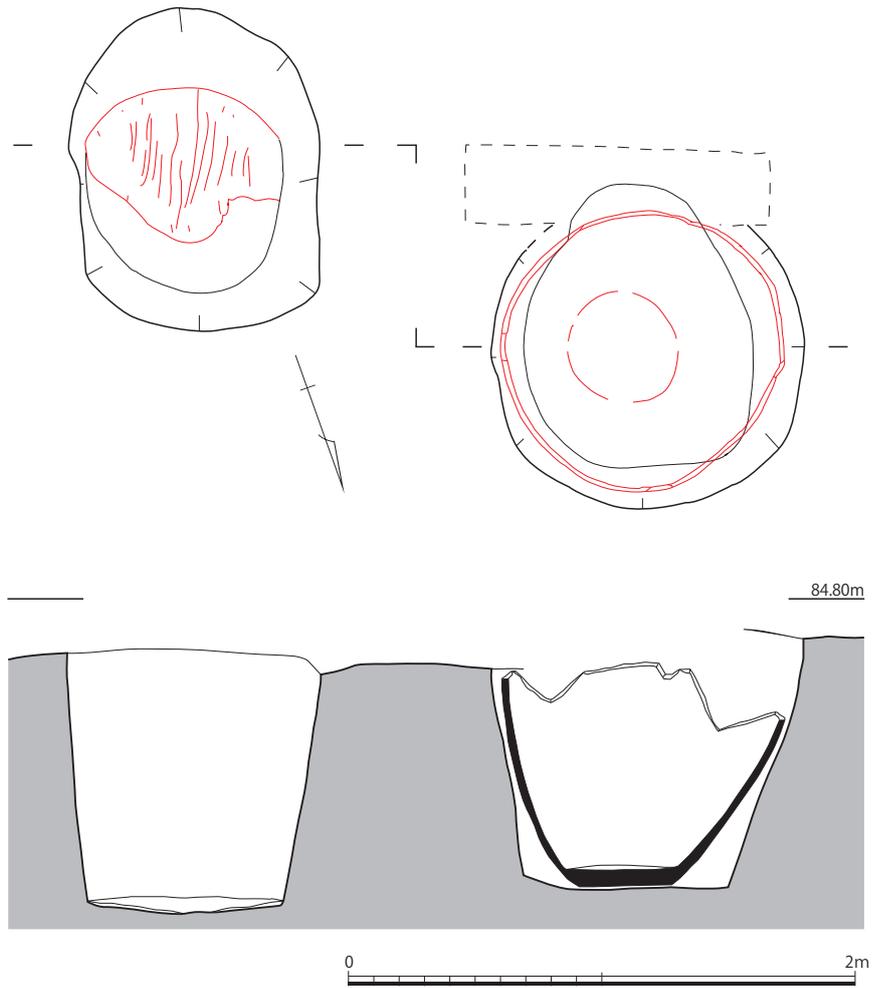
第7図 2号建物実測図（1/80）



第 8 图 3 号建物実測図 (1/80)



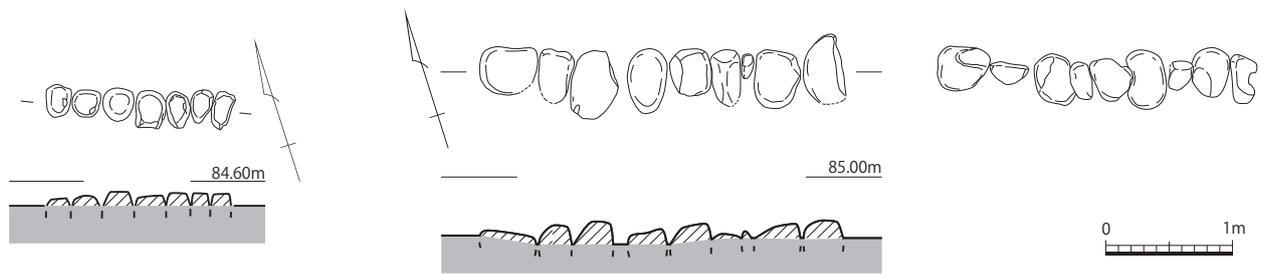
第 9 图 4 号建物実測図 (1/60)



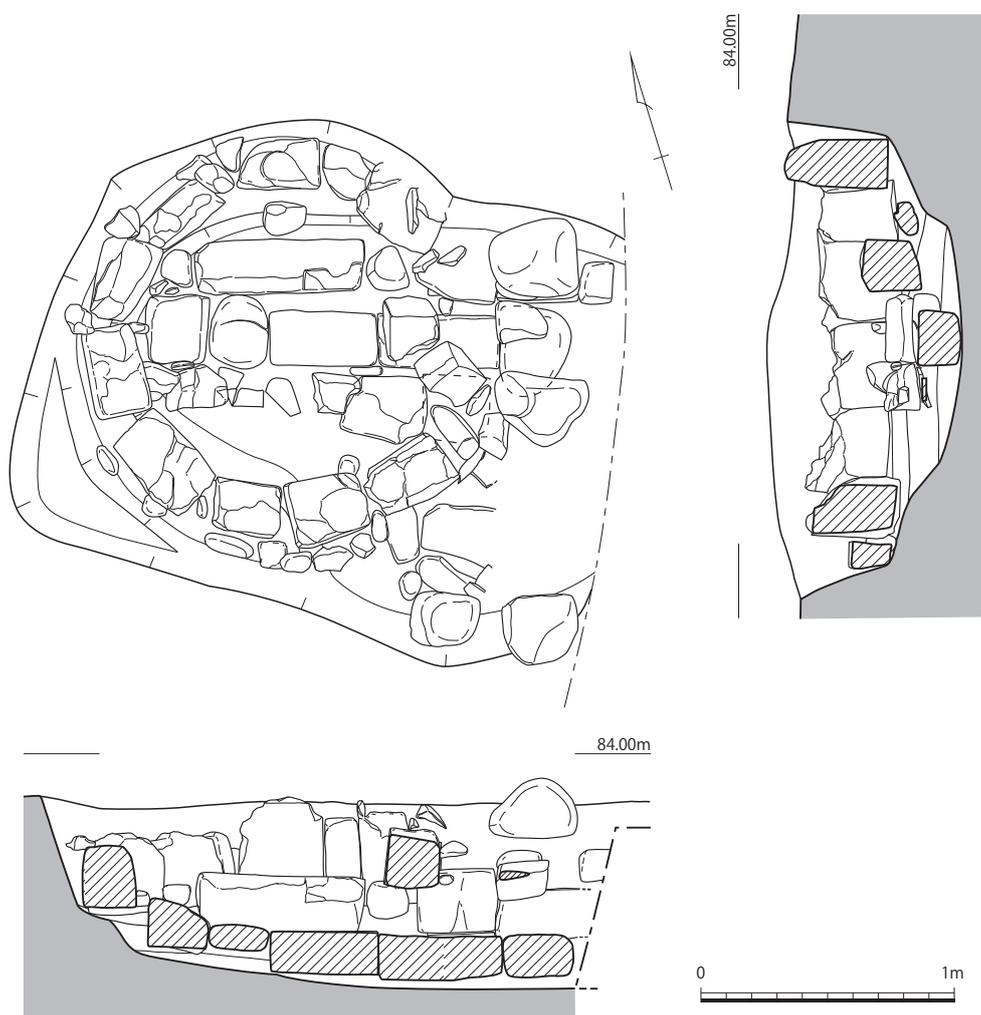
第10図 4号建物内便槽実測図 (1/30)



第11図 3・4号建物出土遺物実測図 (1/3、3のみ 1/8)



第12図 1・2号玉石列実測図 (1/60)



第13図 カマド実測図 (1/30)

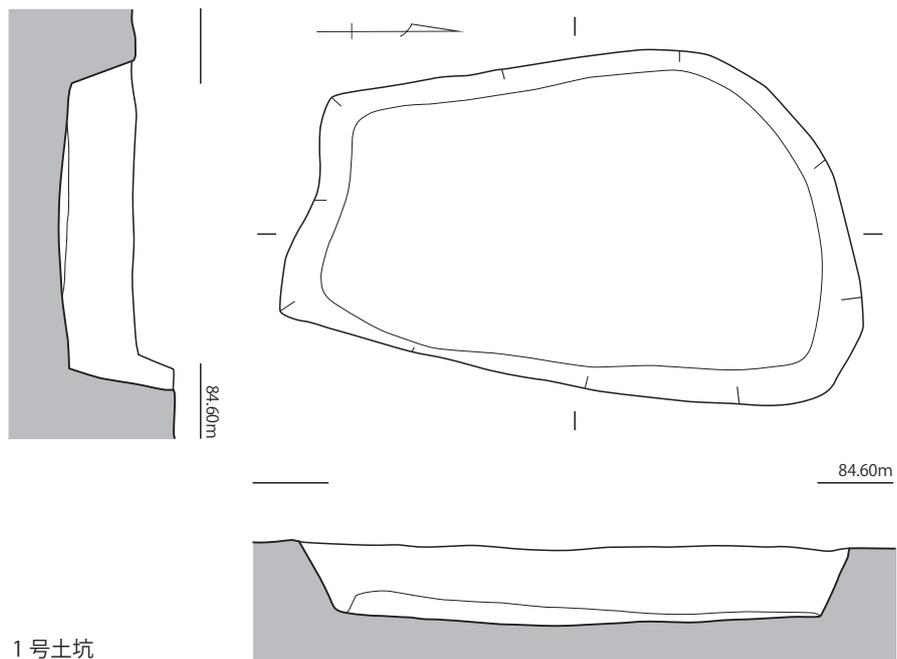
規模については、直径（南北軸）が内法で約 1.2 m、掘り方で約 1.9 m を測る。焚き口の長さ約 0.7 m、幅 0.2 m で、調査区東壁より、奥行き約 1.9 m を測る。石積みの高さは床面より最大で約 50 cm を測る。石を除去した掘り方の床面までの深さは、70 ～ 80 cm を測る。

4. 土坑

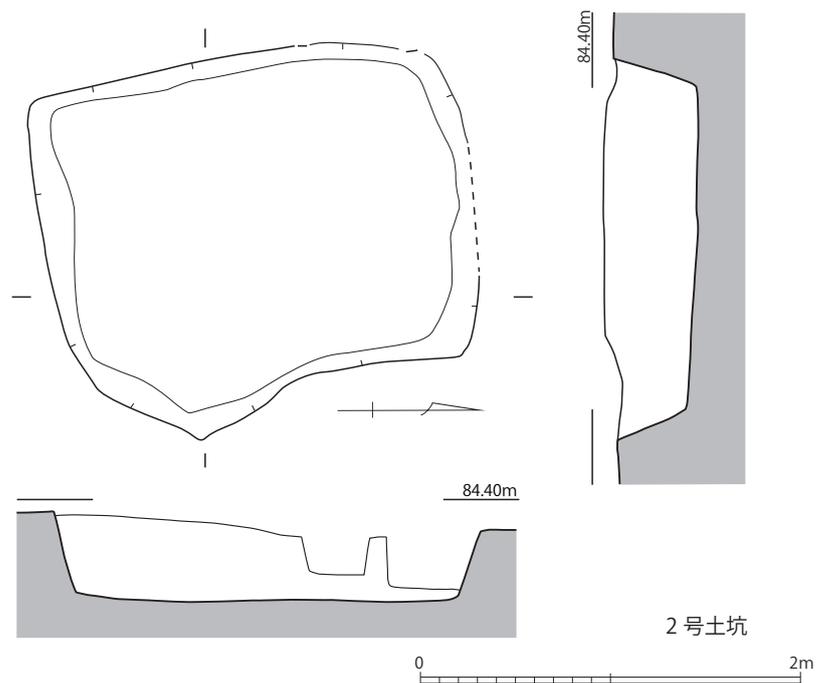
土坑は7基確認されたが、前述したように1・2号土坑は下層、3～7号土坑は最下層において、検出された。

1号土坑 (第14図 図版4)

この土坑は、調査区北側で確認された。平面形はやや歪な長方形を呈し、床面はほぼ平坦で壁は急角度で立ち上がる。埋土はしまりのない、茶褐色土であった。規模は長軸約2.9m、短軸約1.7m、検出面からの深さは約40cmを測る。



1号土坑



2号土坑

第14図 土坑実測図(1) (1/40)



第 15 图 1 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)



第 16 図 1 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3、8・9は 1/8)



第 17 図 1 号土坑出土遺物実測図 (3) (1/3) (写真は一部合成)

遺物は陶磁器や瓦が大量に出土しており、整地造成時に掘り込まれ、これらの遺物が廃棄された土坑と考えられる。

2号土坑（第14図 図版4）

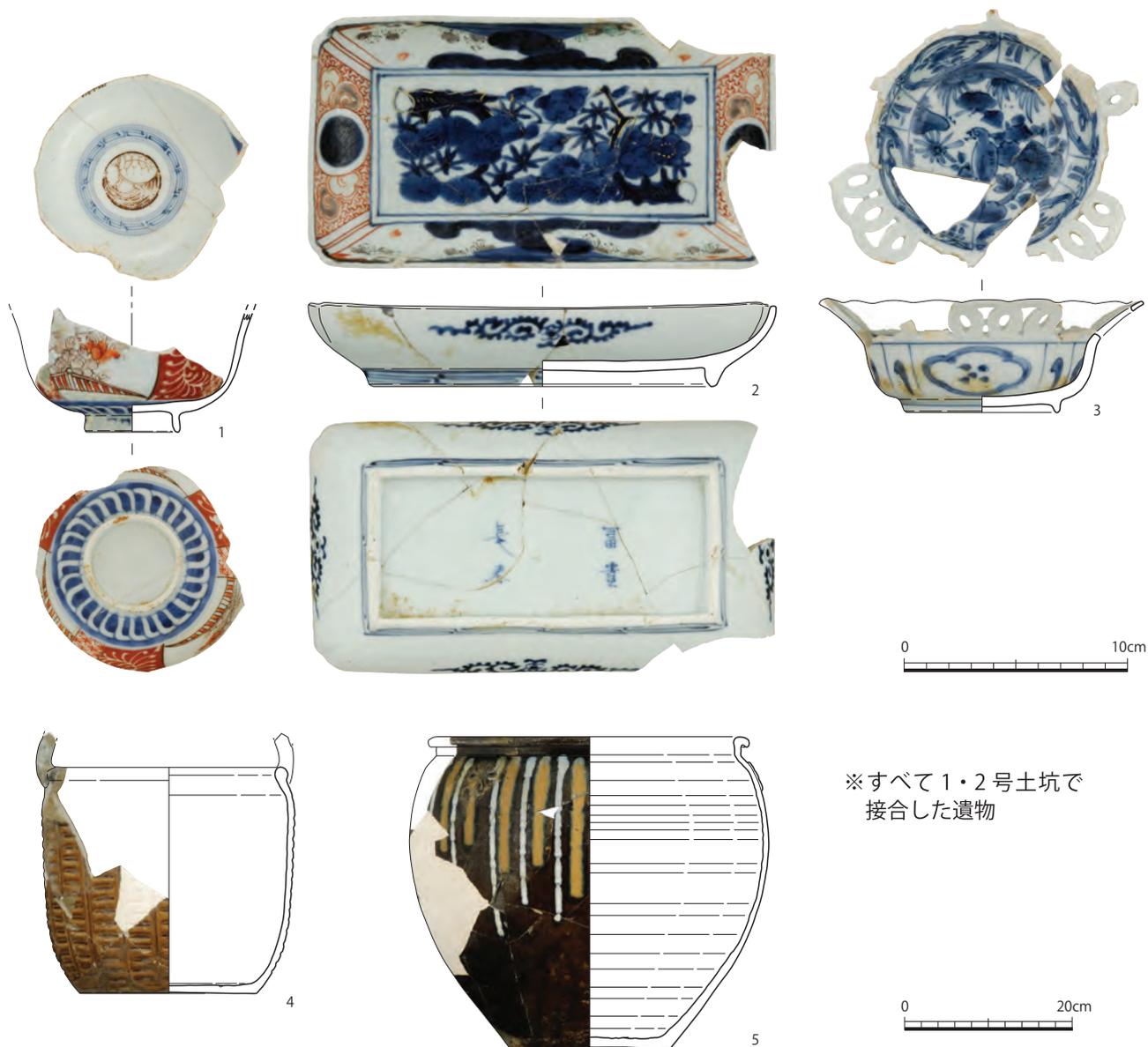
この土坑は、1号土坑の南西側に隣接して確認され、一部ピット等に切られる。平面形はやや歪な長方形を呈し、床面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。埋土は1号土坑同様にしまりのない、茶褐色土であった。規模は長軸約2.2m、短軸約2.0m、検出面からの深さは約50cmを測る。

遺物は1号土坑同様に陶磁器や瓦が大量に出土しており、同様の性格をもつ遺構と考えられる。

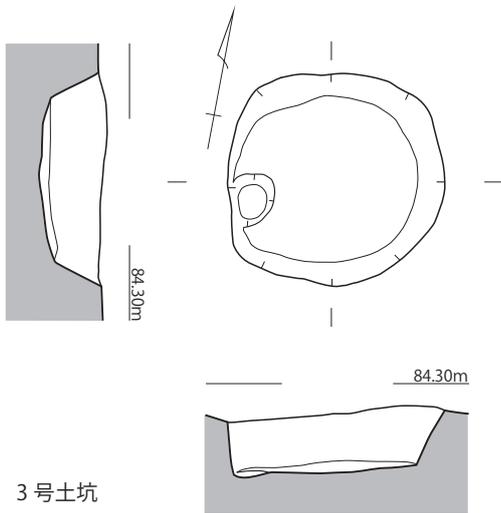
3号土坑（第19図 図版4）

この土坑は、1号土坑の西側で確認された。平面形はほぼ円形を呈する。床面は緩やかな舟底状を呈し、西側にピット状の落ち込みが見られる。壁が急角度で立ち上がる。規模は径約0.9m、床面までの深さは約30cmを測る。

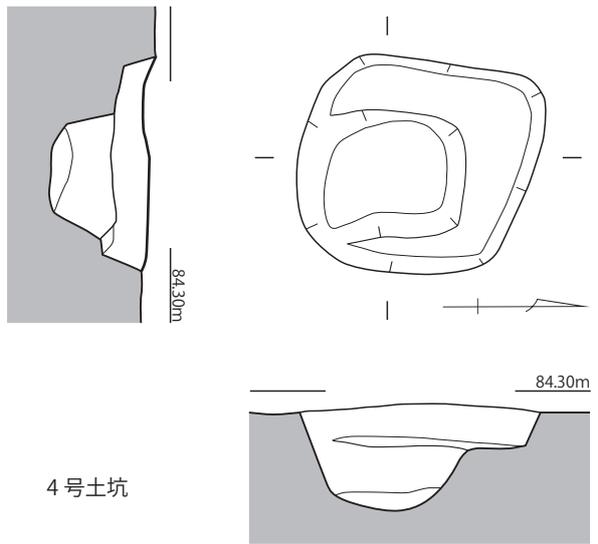
遺物は出土しなかった。



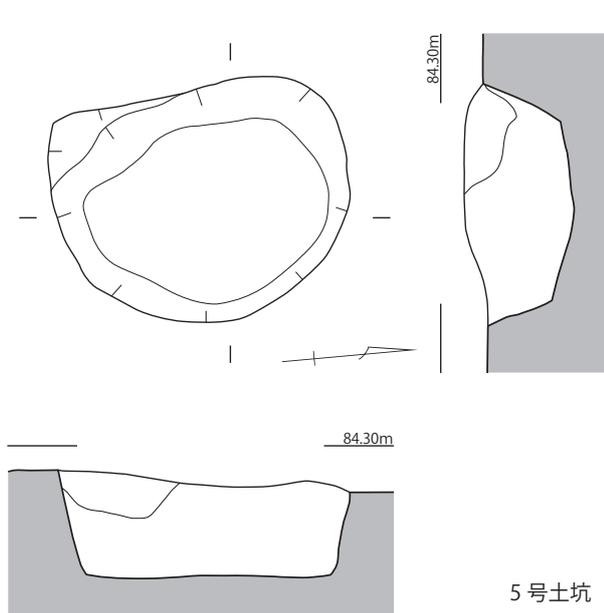
第18図 1・2号土坑出土遺物実測図（1/3、4・5は1/8）



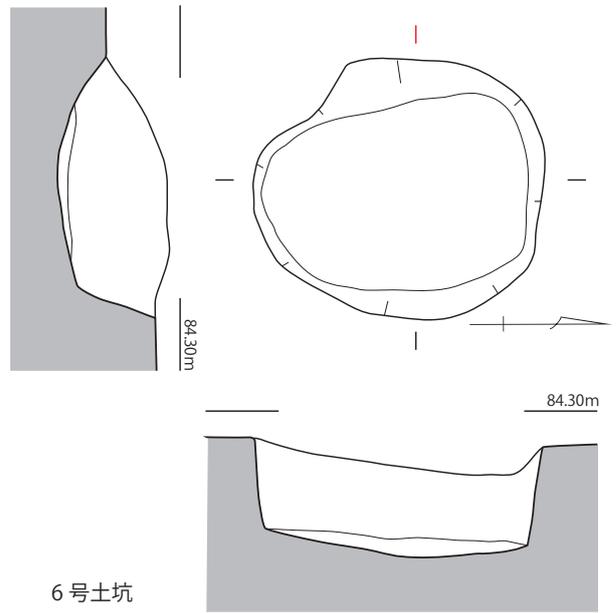
3号土坑



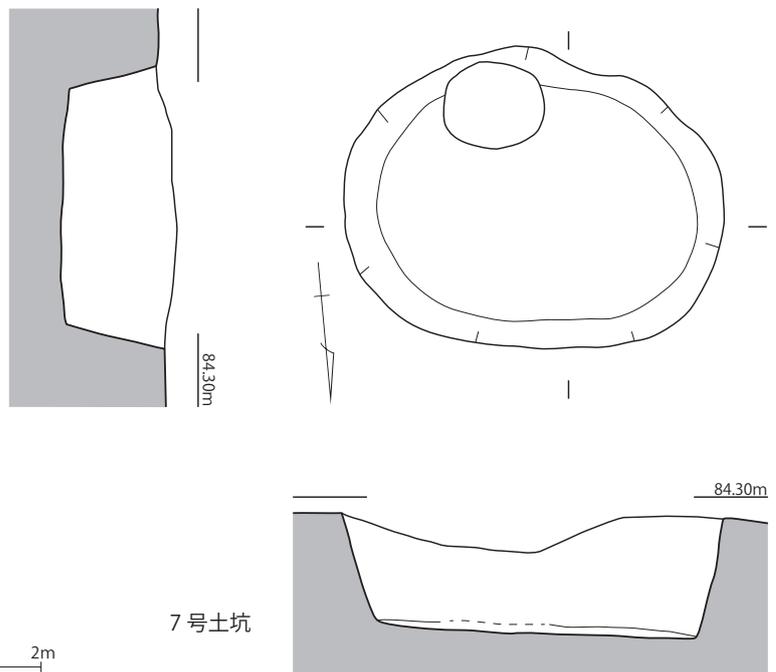
4号土坑



5号土坑



6号土坑



7号土坑



第19图 土坑实测图(2) (1/30)

4号土坑（第19図 図版4）

この土坑は、3号土坑の北西側で確認された。平面形は歪な円形を呈し、床面は2段掘りで、1段目は平坦、2段目は丸底状となっている。壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸、東西軸ともに約0.9 m、床面までの深さは1段目までが約15 cm、2段目までが約45 cmを測る。

遺物は陶磁器類は出土したものの、図化可能なものはなかった。

5号土坑（第19図 図版4）

この土坑は、4号土坑の西側で確認された。平面形は歪な円形を呈し、南西側は肩が崩れている。埋土は黄色土を呈していた。床面は、東西方向は中央に向かって落ち込み、南北方向はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸約1.1 m、東西軸約1.0 m、床面までの深さは約40 cmである。

遺物は出土しなかった。

6号土坑（第19図 図版5）

この土坑は、4号建物の東側で確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は中央に向かって傾斜している。壁は東西側はほぼ垂直に立ち上がるが、南北方向は肩が崩れているため、傾斜は緩い。埋土は茶色土を呈していた。規模は南北軸約1.1 m、東西軸約1.0 m、床面までの深さは約40 cmである。

遺物は白磁の水滴のほか、陶磁器が出土している。

7号土坑（第19図）

この土坑は5号土坑の北側で確認された。平面形は楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸約1.5 m、東西軸約1.1 m、床面までの深さは約50 cmである。

遺物は出土しなかった。

5. その他の遺物（第21～32図 図版6～8）

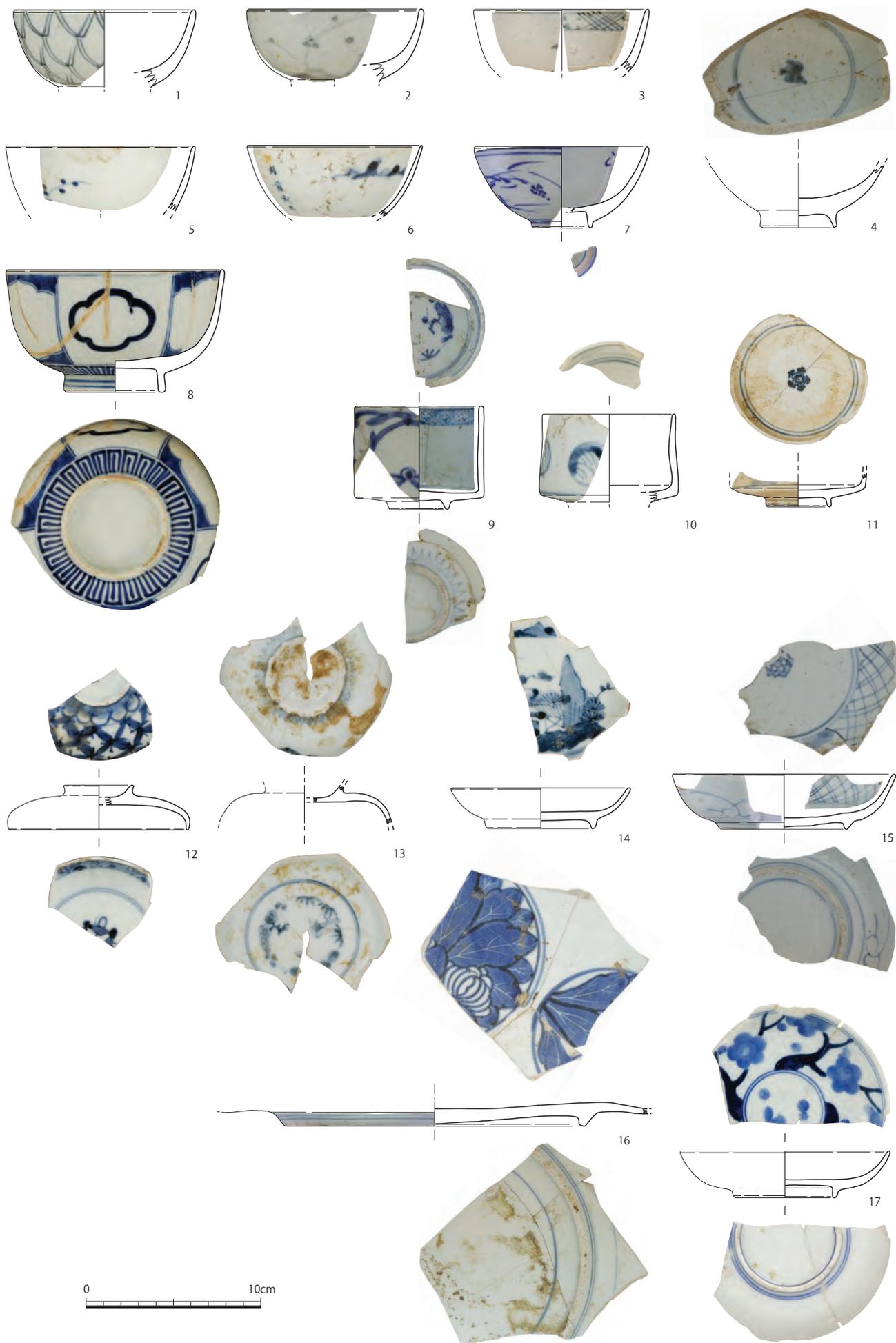
遺構に伴う陶磁器類については、第20図までに図示したが、これら以外にも整地層中などが出土した遺物が大量にある。それらの遺物を上層・中層・下層・最下層毎に図示している。また、瓦も大量に出土しており、どの建物に伴うものか、判然としないものがあるものの、特徴的なものを図示した。

第30・31図は瓦である。瓦当の巴文には、一ツ巴、二ツ巴、三ツ巴の3種類が見られる。また、「治」が刻印された瓦当もあり、窯を示すものと考えられる。

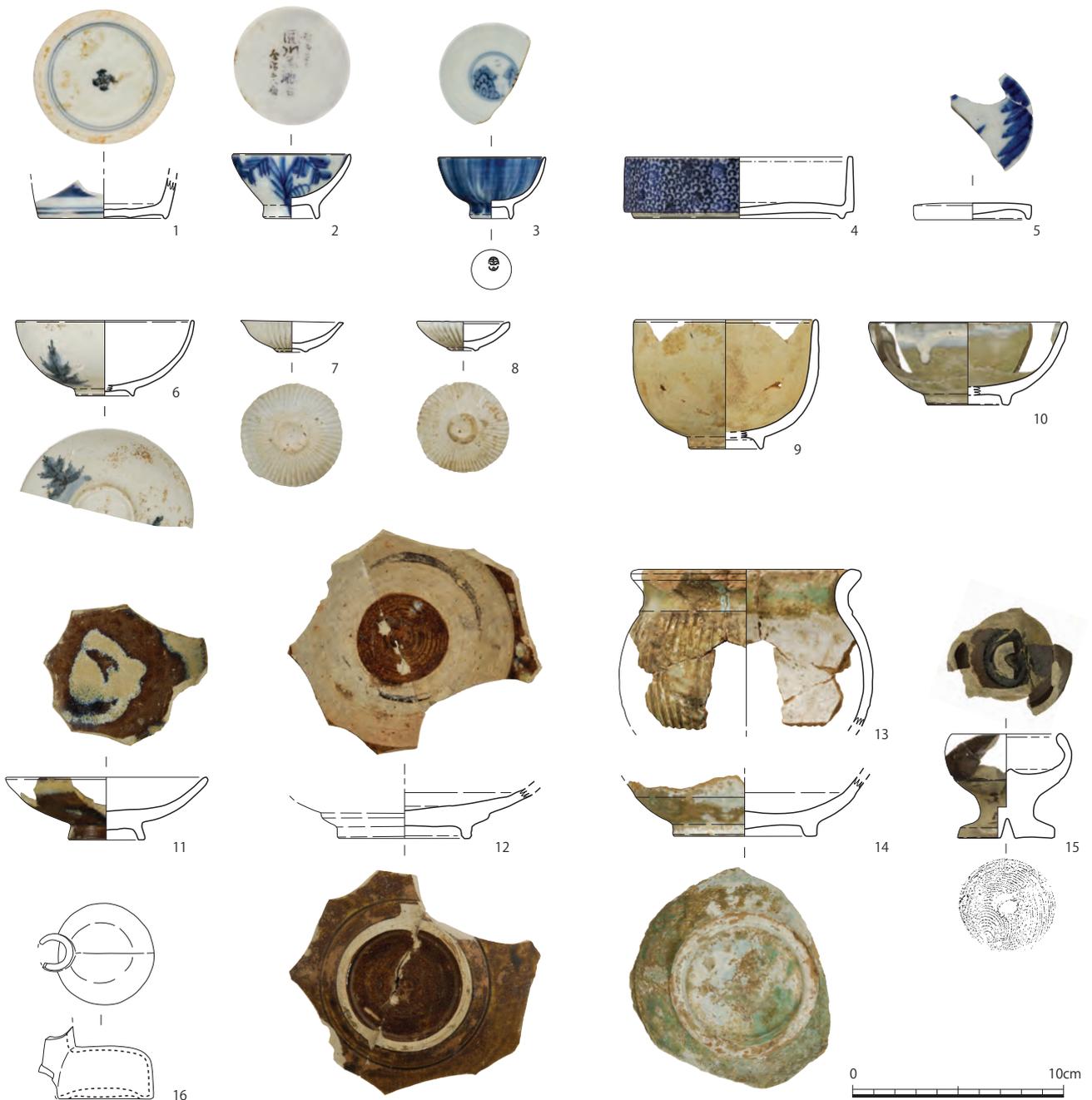
第32図1～3は硯である。何れも色調は赤褐色を呈する。1は一部欠損しているが、長さは13.5 cmを測る。2・3は、全体の1/3ほどを欠損している。1・2の裏面には、「赤間関」と刻まれている。現在の山口県下関で生産されたもので、当時の藩主の贈答品に用いた硯である。4は土鈴である。長さ3.3 cm、幅2.7 cm、厚さ2.4 cmである。色調は鈍い黄橙色を呈する。5は鉄釘である。角釘であり、豆田町では明治16年（1883）年以前の建造物に使用されたことが分かっている。先端が曲がっている。長さ7.6 cm、厚さ0.6 cm、重さ9.75 gである。6・7は銅製の煙管である。6は、直線の吸口が残るが、雁首が欠損している。羅字の上面には形は不明であるが、刻印が施される。また、先端には木質が残っている。長さ6.8 cm、幅1.0 cm、径1.0 cm、重さ7.87 gである。7は吸口が欠損し、雁首が残る。長さ7.5 cm、幅2.4 cm、吸口側の径1.0 cm、重さ13.57 gである。



第20図 2・6号土坑出土遺物実測図 (1/3、6のみ1/8)



第 21 图 A区上層出土遺物実測図 (1) (1/3)



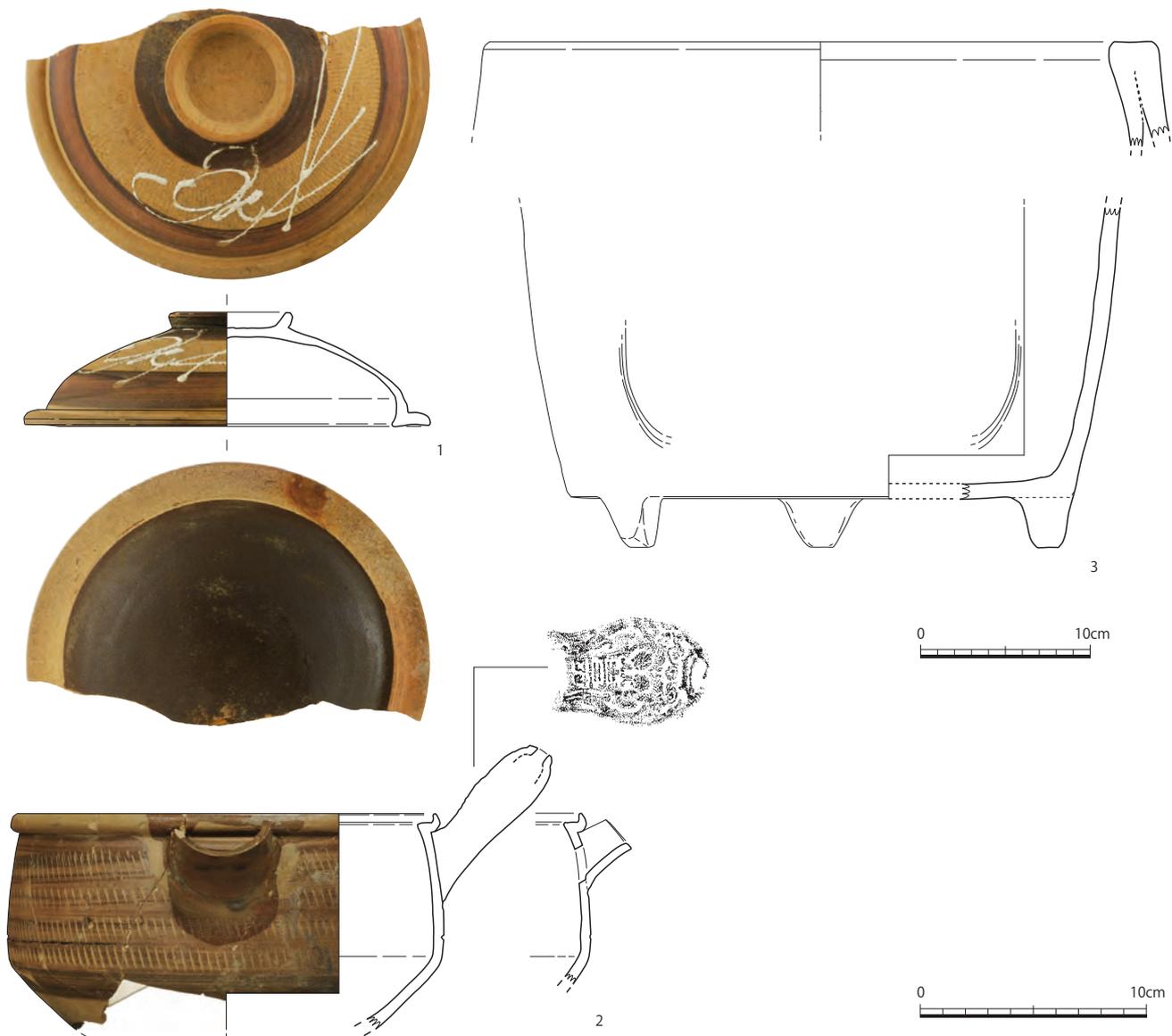
第 22 図 A区上層出土遺物実測図 (2) (1/3)



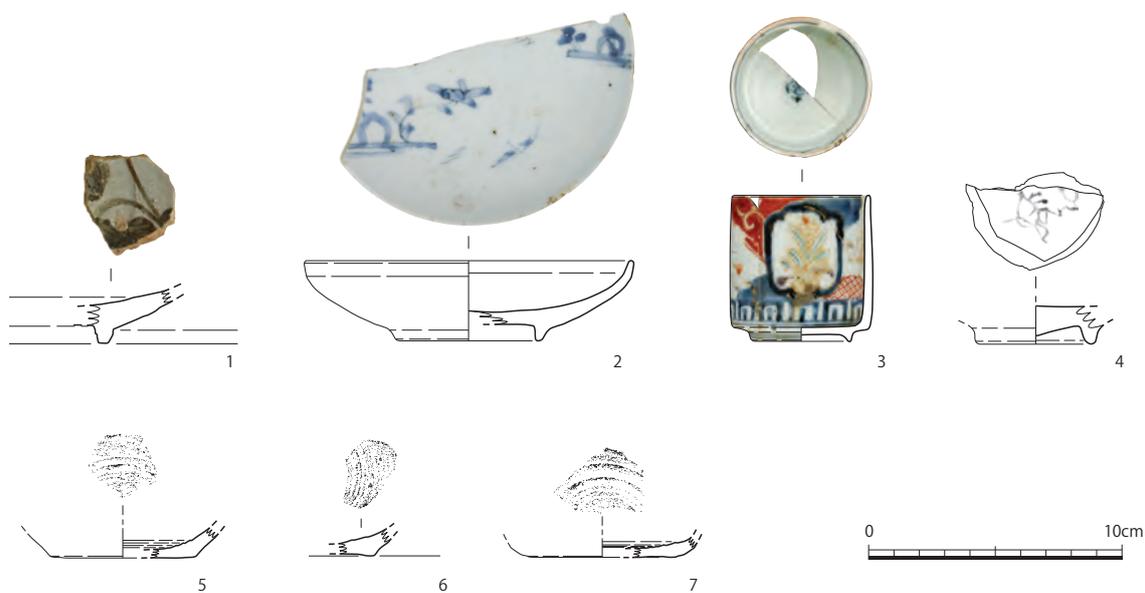
第 23 図 A区中層出土遺物実測図 (1/3、3のみ 1/4)



第 24 图 A区下層出土遺物実測図 (1) (1/3)



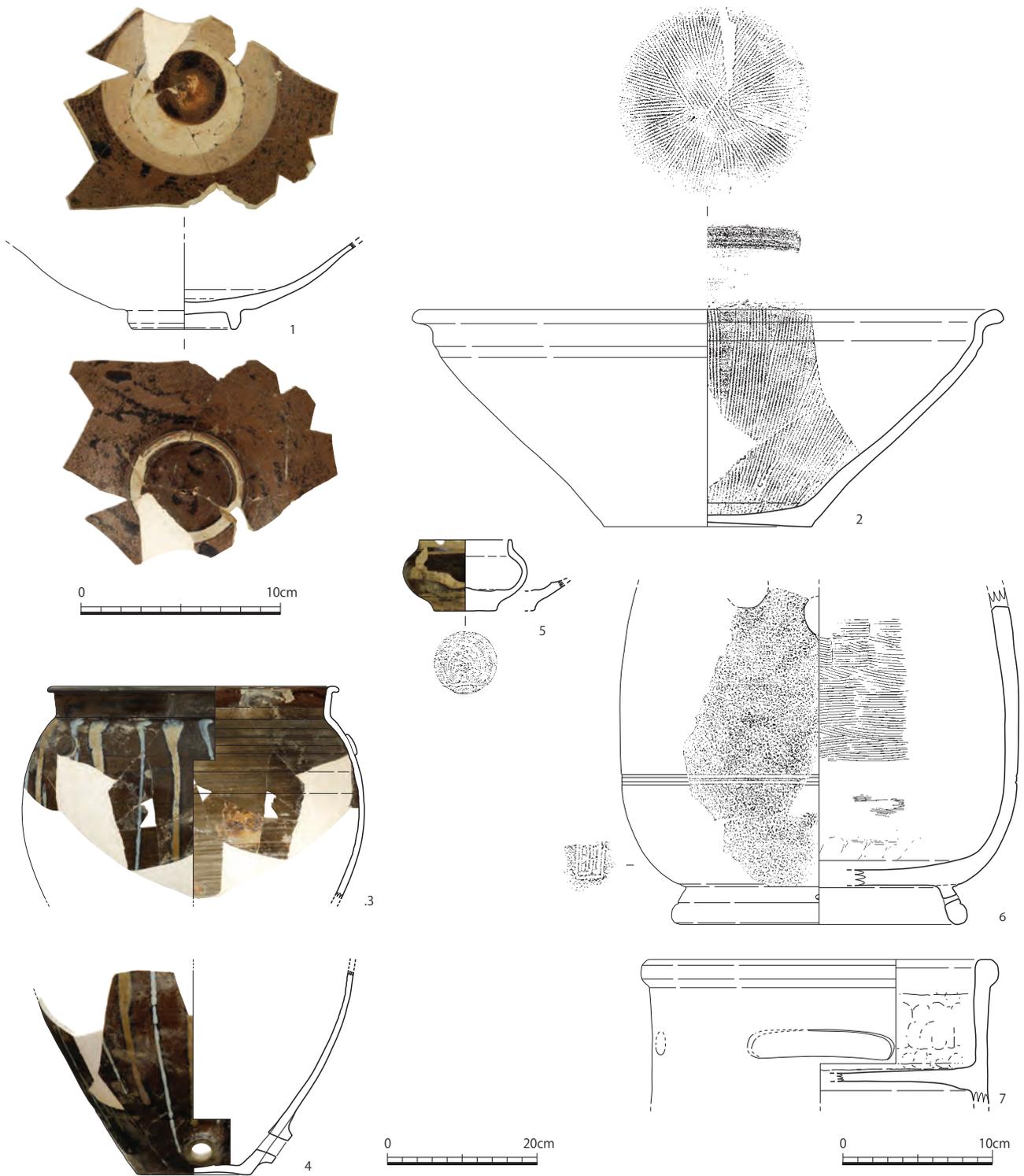
第25図 A区下層出土遺物実測図(2) (1/3、3のみ1/4)



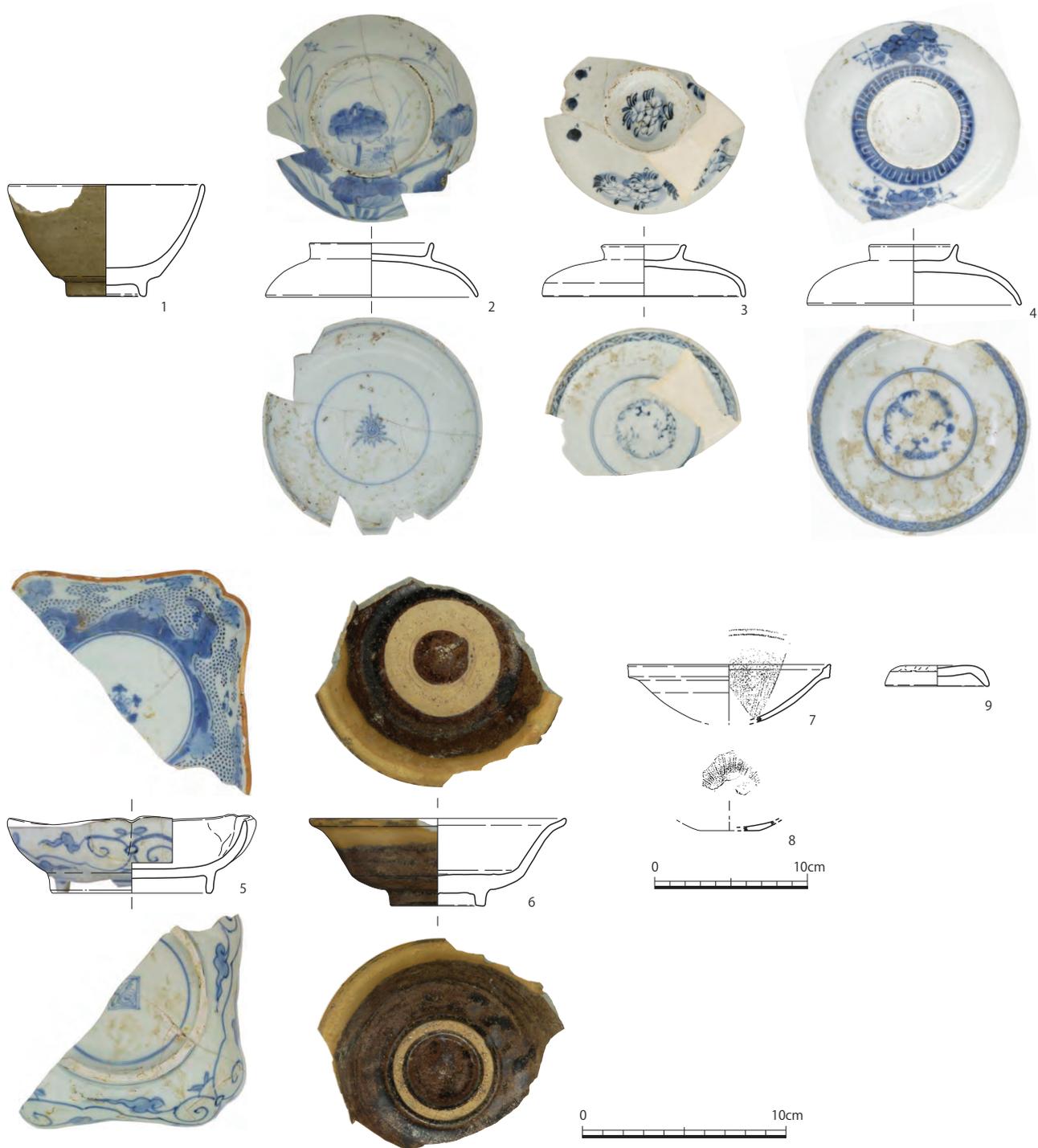
第26図 A区最下層出土遺物実測図(1/3)



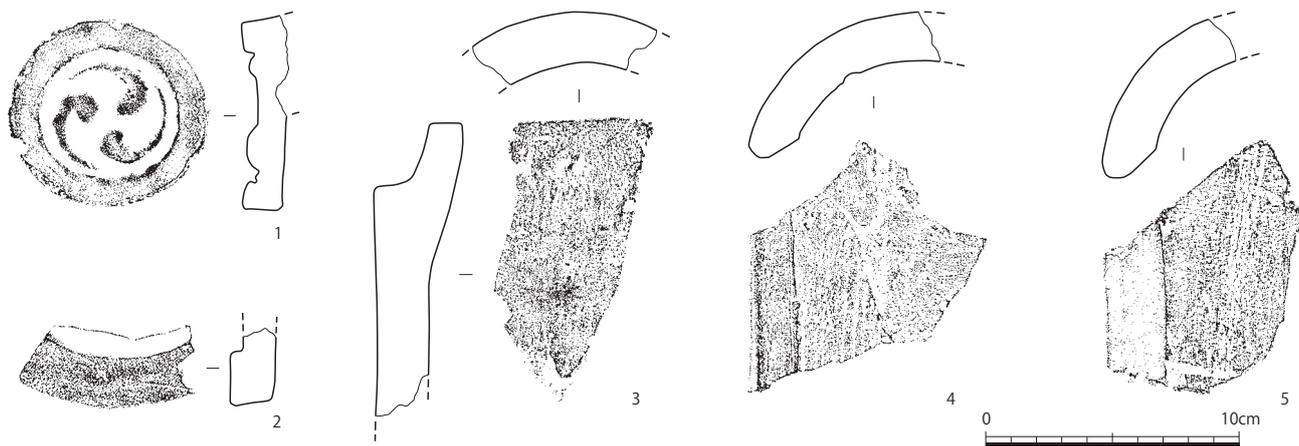
第27図 A区出土遺物実測図(1) (1/3、11のみ1/8)



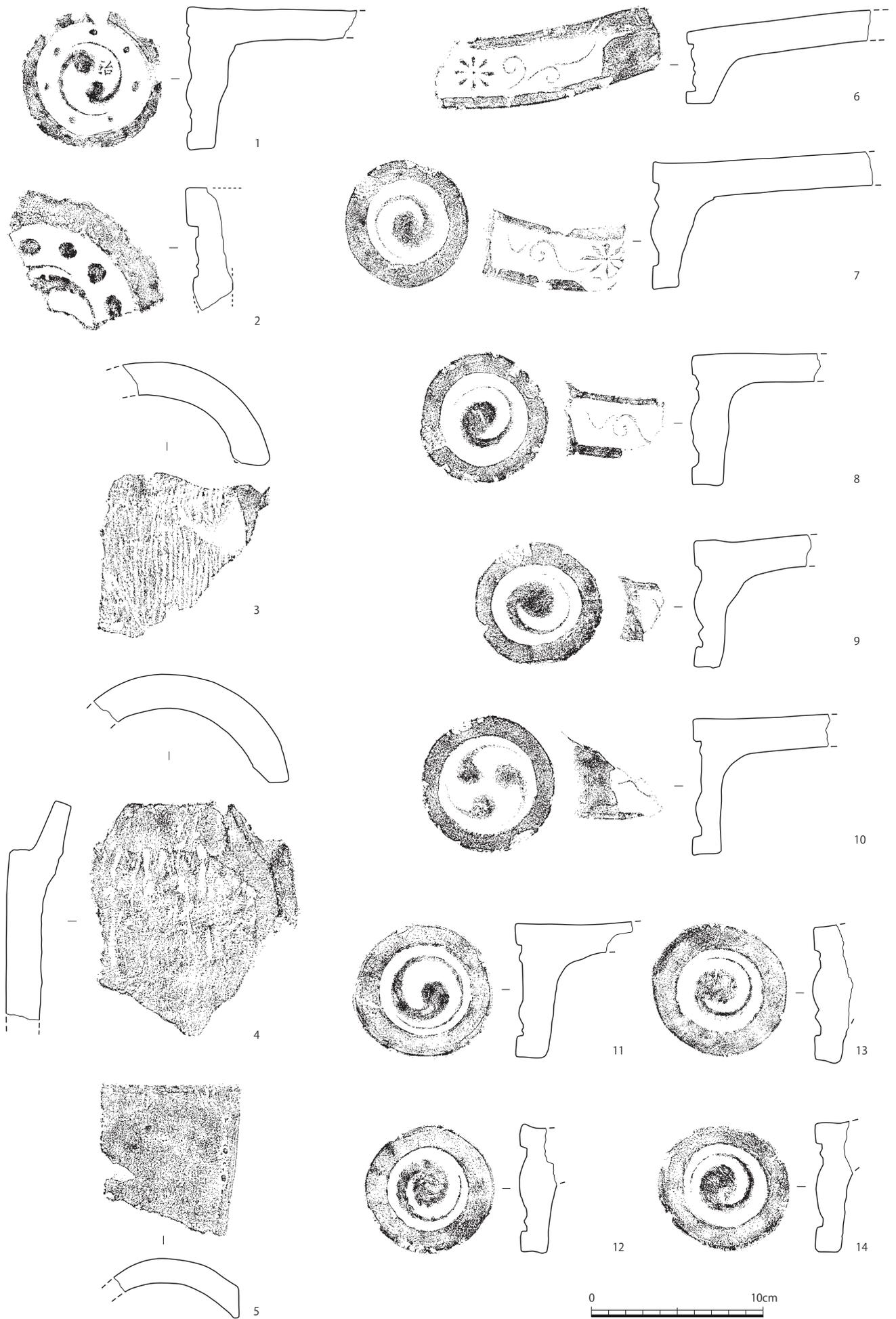
第 28 図 A区出土遺物実測図 (2) (1/3、3・4は 1/8、6・7は 1/4)



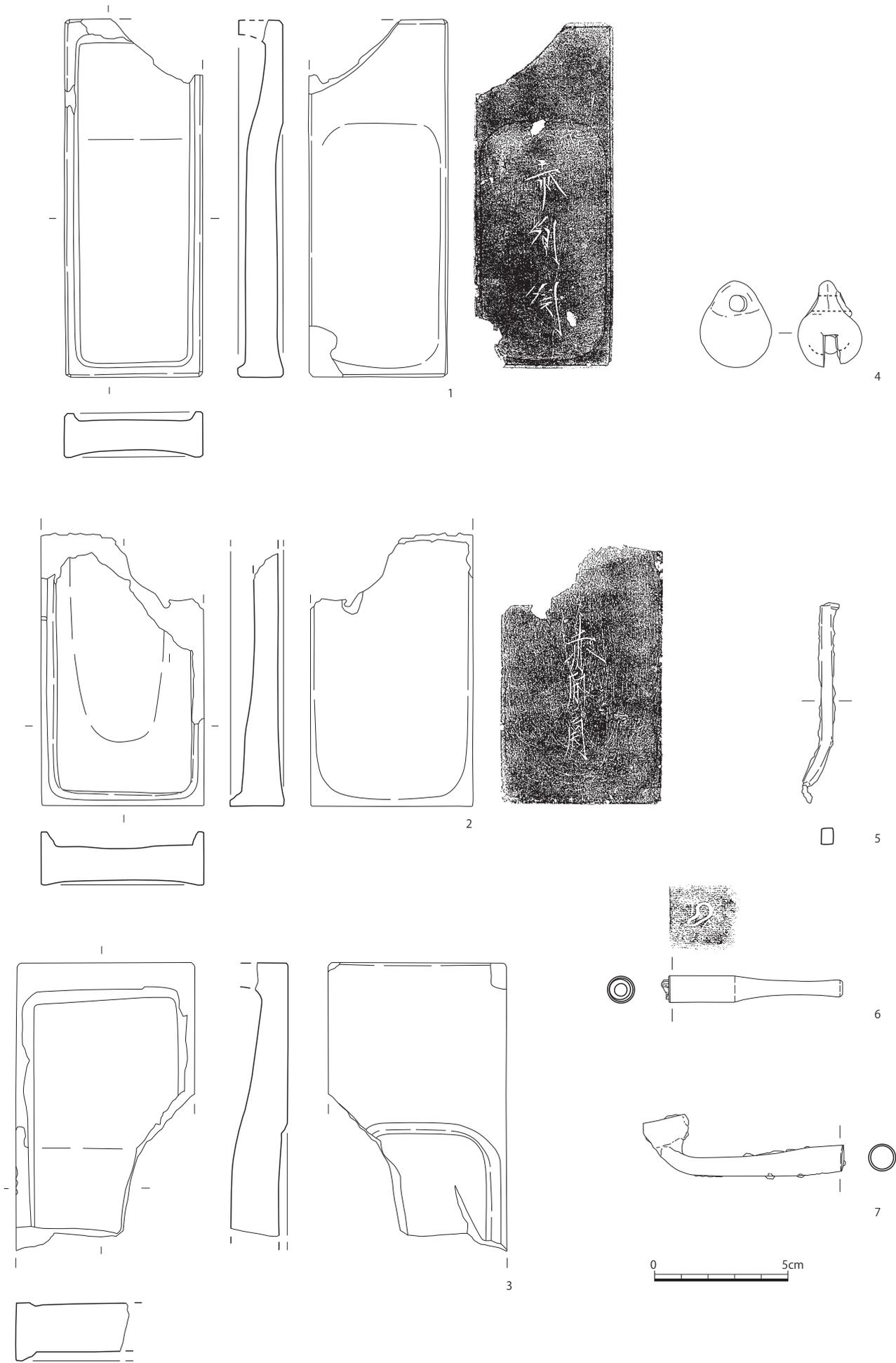
第29図 A区出土遺物実測図(3) (1/3、8のみ1/4)



第30図 A区出土瓦実測図(1) (1/3)



第31图 A区出土瓦实测图(2)(1/3)



第 32 図 A区その他の遺物実測図 (1/2)

(3) B区の遺構と遺物 (第33～35図 図版5)

B区は元来、池があった部分で現在、縁部分に河原石が配されている。まず、真砂土によって埋められている部分での掘り下げを行った結果、真砂土(2層)が約80cmの厚さで埋められており、池の底はコンクリートが貼られていた(3層)。そのコンクリートの下層には灰色の礫層(4層)、灰黒色の粘質土層(5層)が堆積し、その下層に地山である黄褐色砂礫層が検出された。4層の礫層は池を造る際に埋められたものであると判断した。コンクリートについては、後世に貼られたものと思われ、元々は礫層が池の底であったと思われる。なお、調査時に確認できた池の規模は、南北方向に約5mである。

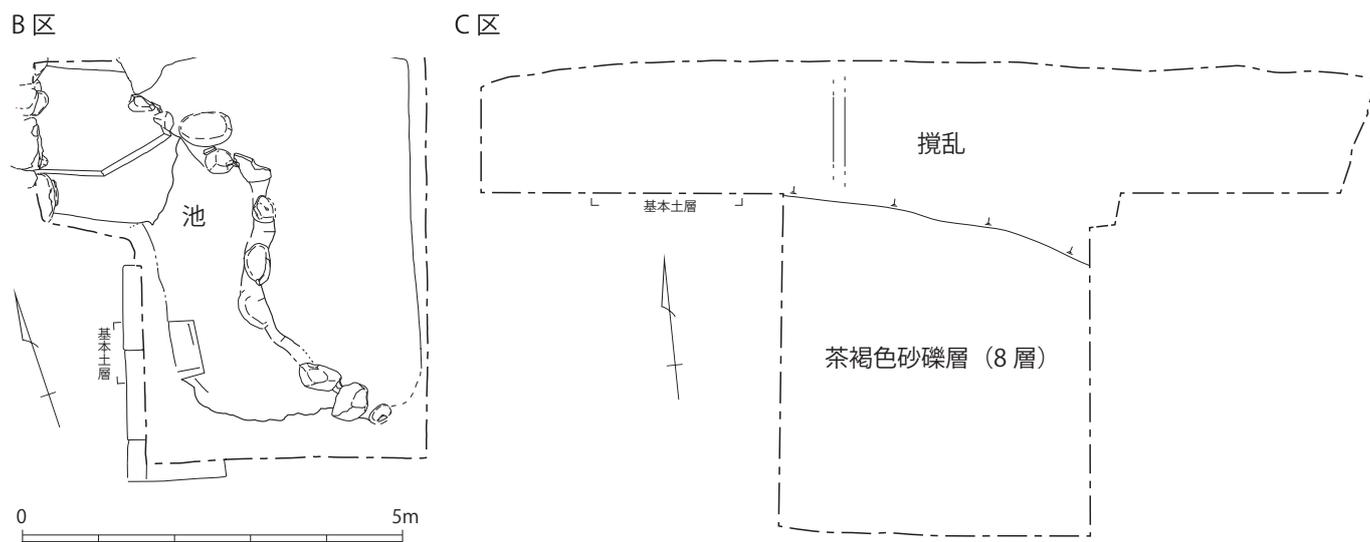
また、池が掘られた年代については、時期を明確に決定できる遺物が出土しなかったことから不明である。遺物は、陶磁器が出土している。

(4) C区の遺構と遺物 (第33～35図 図版5)

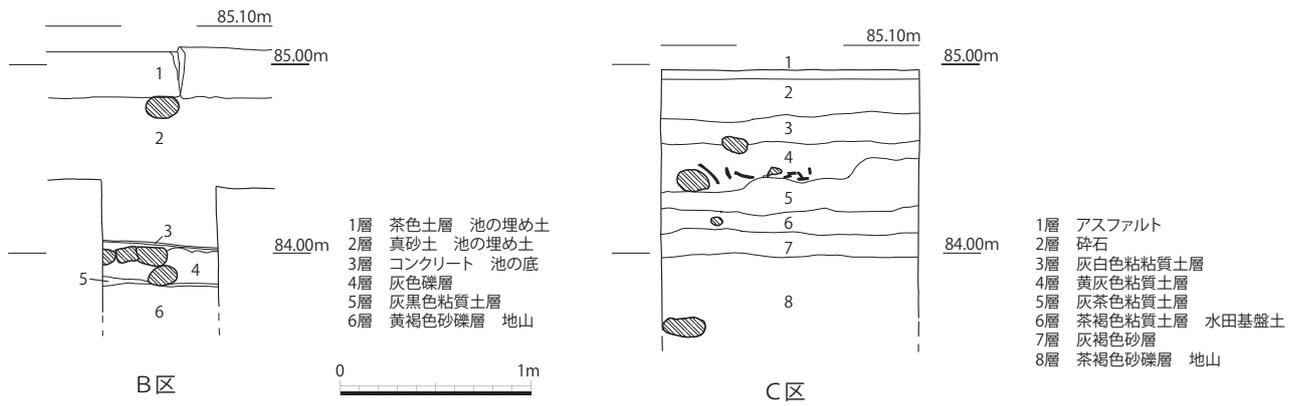
C区の調査は、アスファルトカットの後、重機で掘り下げた結果、整地層と考えられる層が確認できた(4層)ものの、攪乱を大きく受けていたことから、その広がりには確認できなかった。但し、この4層上面の標高は84.5～84.6mを測り、A区の整地層とほぼ同じ(84.55m)であることから、C区付近においても整地が行われていたと考えられる。

最下層で茶褐色の砂礫層(8層)が確認され、地山と判断した。この面についても、遺構検出を行ったが、やはり攪乱を受けており、遺構は確認できなかった。

遺物については、4層中より整地層の造成中に埋められたと考えられる陶磁器が出土している。



第33図 B・C区全体図 (1/100)



第34図 B・C区基本土層図 (1/40)



写真10 B区基本層



写真11 C区基本層



第35図 B・C区出土遺物実測図 (1/3、6のみ 1/4)

IV 総括

前章までに今回の調査で確認された遺構・遺物について記述してきた。最後にこれらの遺構の時期や性格などについて、主にA区を中心に整理する。

まず、遺構の時期について見ていく。1号建物については、18世紀後半から19世紀前半にかけての肥前系や有田の陶磁器が出土している。熱を受けている礎石の存在から、明和9年(1772)に起こった大火以後、これらの礎石が再利用されたと考えれば、時期が一致していることから建築年代は18世紀後半と考えられる。

2号・3号建物については、遺物量は少ないものの、1号建物と軸方向が揃っていること、礎石を据える整地層のレベル(84.5～84.6m)もほぼ同じであり、同時期のものと考えて差支えないだろう。

4号建物についても、遺物から時期がわかるものでは、19世紀前半から中頃の肥前の碗蓋が出土していることから、1～3号建物と建築年代は異なるかもしれないが、同時期に存在していたと考えられる。

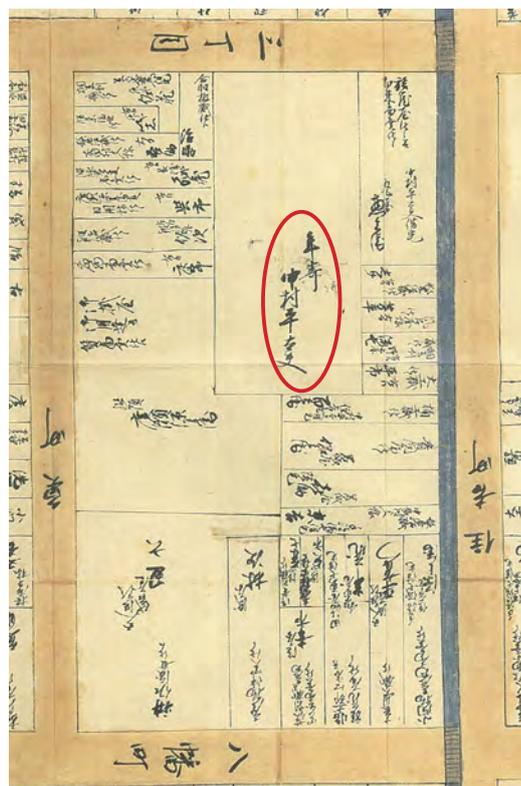
次に下層の遺構についてみていく。まず、遺物が出土している1・2号土坑については、時期幅があるものの、18世紀後半から19世紀前半の陶磁器が出土しており、建物と近い時期が想定される。このことから、建物建設に伴う整地層の造成時に埋められた廃棄土坑の可能性が高いであろう。カマドについては、遺物が出土していないことから、明確な時期比定はできないものの、整地層の造成以前の18世紀後半以前と考えられる。

最下層の遺構では、6号土坑から18世紀後半から19世紀前半の水滴が出土しているが、検出されたレベルから、掘削時期を示すものではなく、流れ込みと思われる。その他の土坑については、遺物が出土していないことから、明確な時期はわからないが、少なくとも整地層造成前の18世紀後半より前の時期としておきたい。

最後に今回の調査で確認された建物の性格について考えてみる。調査における大きな成果として、建物基礎になる玉石列が確認されたことが挙げられる。この玉石は河原石を利用したもので、永山城跡の石垣にも使われているものである。玉石の上にヒカリツケを施した切り石を据え、建物の基礎とするもので、耐火性のある蔵などに使われるものであった。それが数回の大火以降、住宅にも使用されるようになったと考えられる。

また、1号建物より出土した、有田焼の皿「三丁目 中村」の墨書き(第6図5)により、元治元年絵図(第36図)に描かれた町年寄・中村平太夫の土地であることが裏付けられた。建物の規模からみると1間が約2m弱とみた場合^{註1)}、1号建物は桁行4間×梁行5間、2号建物は東西方向(桁行か?)7間の規模となる。当時の豆田町の一般的な住宅は間口が3間ほどしかなかったのに対し、格段に大きいことがわかる。中村家は三松家とともに豆田町の町年寄を務めた家であり、有力者の家や土地の規模が大きかったことを示すものと言える。また、これらの建物については、同一敷地内に配置された、主屋や座敷などを構成するものと思われる。3号建物については、東側に確認された2列の礎石列の軸がややずれていることから、居宅ではなく、蔵の可能性^{註2)}がある。

この他、一ツ巴の軒平瓦が目される。この種の瓦は現在、市内では豆田町の草野家・手島家、隈町の山田家の三家のみで確認されているが、何れの家も当時の町年寄や有力商家である。今回の中村家でもこの瓦が使用されていることから、有力な家に限って使用された可能性が高いと言えそうである。この他、この酸化鉄の付着した紅皿も有



第36図 元治元年豆田町絵図

力層の証左となるものである^{註3)}。

なお、中村家については、幕末に町年寄を務めた平太夫（元雄）は、明治時代に入り日田を出る。その後、元雄氏は群馬県知事、貴族院議員、内務次官を歴任する。それ以降の中村家の土地・建物は、旅館（明治23年（1890）頃）や裁判長の公舎（昭和初期）などを経て、今回の交流館として整備された古賀医院が建設された昭和7年（1932）より以前に取り壊されたものと考えられる。

最後になるが、最下層やC区から土師質土器が出土したことは、豆田町の形成以前の生活の痕跡があったことを示すものであり、今回の調査成果の一つと言える。

註

- 1) 1間あたりの長さについての詳細な検討は本報告では行えなかったが、1.9～2.0mであったと思われる。
- 2) 岡山理科大学・江面嗣人教授のご教授による、
- 3) 別府大学・上野淳也准教授のご教授による。

参考文献

宮本雅明編『日田豆田町』日田市豆田町伝統的建造物群保存対策調査報告 日田市教育委員会 2004

第1表 出土遺物観察表（1）

図号	区分	遺構名	種別	器種	産地	窯	年代	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
								口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第6図1	A	1号建物	磁器	碗	肥前系			(11.1)	—	—	(4.8)	施釉	施釉	精製土	良	灰褐色	灰褐色	
第6図2	A	1号建物	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(10.0)	—	(3.8)	5.0	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	くらわんか手
第6図3	A	1号建物	磁器	碗	肥前		19C前半	8.4	—	(3.4)	4.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	小碗
第6図4	A	1号建物	磁器	皿	肥前系			12.6	—	7.0	3.5	施釉	施釉	精製土	良	淡黄色	淡黄色	高台露胎
第6図5	A	1号建物	磁器	皿	有田		19c	—	—	6.0	(2.2)	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	「三丁目 中村」墨書き 高台より内側露胎
第6図6	A	1号建物	陶器	碗	熊本	小袋か	不明	—	—	5.4	(6.7)	施釉	施釉	B	—	黒褐色	黒褐色	
第6図7	A	1号建物	陶器	皿	九州		不明	—	—	4.6	(2.1)	施釉	施釉	E	—	黒褐色	z	
第6図8	A	1号建物	陶器	壺	九州	小鹿田か	18C後半～19C前半	24.6	—	11.6	32.7	施釉	口縁部のみ施釉	精製土	—	暗赤褐色 灰白色	暗赤褐色	外面底部に付着物あり
第6図9	A	1号建物	須恵器	坏身				(10.5)	—	—	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	B	良	灰色	灰色	
第11図1	A	3号建物	磁器	碗	肥前系			(8.9)	—	(4.9)	—	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	
第11図2	A	4号建物	磁器	碗蓋	肥前		1810～1860年代	(10.5)	—	—	3.2	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反蓋 ペンシルドローイング技法
第11図3	A	4号建物	陶器	甕	九州		不明	56.2	—	23.6	46.3	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	暗赤褐色	
第15図1	A	1号土坑	磁器	碗	肥前		1810～1860年代	9.5	—	3.6	5.4	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反碗
第15図2	A	1号土坑	磁器	碗	肥前		1810～1860年代	(10.4)	—	(4.0)	5.7	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反碗、焼継あり 見込み銘か
第15図3	A	1号土坑	磁器	碗	長崎	龜山	19C前半	10.2	—	3.8	5.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	銘「龜山製」
第15図4	A	1号土坑	磁器	皿	肥前		18C後半～19C前半	10.6	—	5.3	2.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	輪花
第15図5	A	1号土坑	磁器	皿	肥前		1820～1860年代	24.0	—	14.6	4.3	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	輪花 銘「乾」 へり支え 焼継あり
第15図6	A	1号土坑	磁器	皿	肥前		17C末～18C前半	—	—	—	(2.8)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第15図7	A	1号土坑	磁器	皿	肥前		18C後半～19C前半	(20.0)	—	(14.2)	4.0	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	内底「富貴長春」
第16図1	A	1号土坑	磁器	鉢	肥前		19C前半～中頃	(20.6)	—	8.2	8.4	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	内底「天明年製」
第16図2	A	1号土坑	磁器	鉢？ 猪口？	肥前		18C後半～19C前半	6.7	—	3.9	5.0	施釉	施釉	精製土	—	瑠璃色	瑠璃色	瑠璃釉 金彩
第16図3	A	1号土坑	磁器	小杯				(7.0)	—	(2.7)	4.3	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	高台露胎
第16図4	A	1号土坑	磁器	レンゲ	肥前？		18C後半～19C	長径 (6.9)	短径 4.8	—	(2.1)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第16図5	A	1号土坑	磁器	胴部片				—	—	—	(1.9)	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	
第16図6	A	1号土坑	陶器	皿	瀬戸美濃		18C後半～19C前半	9.5	—	6.4	2.1	施釉	施釉	E、F	—	黄白色	黄白色	見込み3ヶ所目跡あり
第16図7	A	1号土坑	陶器	皿	福岡	小石原系	18C後半～19C前半	12.8	—	4.4	4.4	施釉	施釉	E	—	黒褐色	黒褐色	見込み蛇ノ目輪剥ぎ
第16図8	A	1号土坑	陶器	鉢	不明		18C後半～19C前半	40.8	—	23.0	24.4	施釉	施釉	精製土	—	浅黄色	灰白色 明青灰色 暗赤褐色	
第16図9	A	1号土坑	陶器	鉢	不明		18C後半～19C前半	(47.0)	—	(14.8)	17.1	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	暗赤褐色	
第16図10	A	1号土坑	陶器	瓶	九州		18C後半～19C前半	3.0	—	8.0	11.9	施釉	施釉	精製土	—	褐色	褐色	墨書「●●▽」
第16図11	A	1号土坑	陶器	播鉢	福岡か		18C～19C	32.8	—	12.2	12.6	回転ナデ後薄く 施釉・ 糸切り	回転ナデ後薄く 施釉・ 播目	E	—	灰黄褐色	灰褐色	
第17図1	A	1号土坑	華南三彩	盤	中国南部		1590～1610年代	(29.4)	—	17.0	5.1	施釉	施釉	E	—	緑色	緑色黄色 灰褐色	口縁緑花

第2表 出土遺物観察表(2)

No.	区名	遺構名	種別	器種	産地	窯	年代	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
								口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第18図1	A	1・2号土坑	磁器	碗	肥前		1810～1860年代	(4.0)	—	(5.4)	—	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	色絵 墨弾き 端反碗 No.47とセット
第18図2	A	1・2号土坑	磁器	皿	肥前		18C	21.0	—	15.6	3.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	ハリ支え、金襴手 内底「富貴長春」
第18図3	A	1・2号土坑	磁器	鉢	肥前		17C後半～18C前半	(14.3)	—	6.8	5.0	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	口縁輪繋ぎ(透かし)
第18図4	A	1・2号土坑	陶器	鉢	九州		18C後半～19C前半	(26.8)	—	(21.0)	(26.2)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色～褐色	灰白色～緑黄色	口縁方形か
第18図5	A	1・2号土坑	陶器	甕	九州	小鹿田か	18C後半～19C前半	(36.2)	—	19.2	37.4	施釉	施釉	精製土	—	黒褐色 灰白色 褐色	褐色～黒褐色	
第20図1	A	2号土坑	磁器	碗	中国か		18C～19Cか	(11.9)	—	4.8	5.3	施釉	施釉	精製土	—	褐色	黄褐色	清朝磁器か
第20図2	A	2号土坑	磁器	皿	鍋島		18C	19.4	—	9.6	4.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	後期鍋島
第20図3	A	2号土坑	磁器	皿	鍋島		18C	19.2	—	9.6	4.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	後期鍋島
第20図4	A	2号土坑	白磁	急須	肥前?		19C	(1.6)	—	4.9	3.0	施釉	施釉	精製土	—	白色		(ままごと道具)
第20図5	A	2号土坑	陶器	皿	福岡	小石原系	18C後半～19C前半	13.1	—	4.2	4.6	施釉	施釉	E	—	黒褐色	黒褐色	見込み蛇ノ目軸割ぎ
第20図6	A	2号土坑	陶器	鉢	九州		18C後半～19C前半	27.2	—	17.9	19.7	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色～灰白色・淡橙色	褐色～灰白色・明黄褐色	
第20図7	A	2号土坑	陶器	灯火具	不明		不明	3.6	—	2.5	3.4	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	暗赤褐色	
第20図8	A	6号土坑	白磁	水滴	肥前		18C後半～19C	長さ(4.7)	幅(4.5)	—	2.1	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図1	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(10.1)	—	—	(4.5)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図2	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(9.8)	—	—	(4.2)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	
第21図3	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(9.8)	—	—	(3.6)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	
第21図4	A	A区上層	磁器	碗				—	—	4.4	(3.7)	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	高台露胎、砂目
第21図5	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半	(10.6)	—	—	(3.8)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図6	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(9.9)	—	—	(4.1)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図7	A	A区上層	磁器	碗				(10.0)	—	(3.4)	4.7	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	高台露胎
第21図8	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(12.3)	—	5.6	7.1	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	焼継あり
第21図9	A	A区上層	磁器	碗				(7.4)	—	6.0	(3.4)	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	筒形碗
第21図10	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(7.5)	—	—	(5.1)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	筒形碗
第21図11	A	A区上層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	—	—	3.5	(1.9)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	筒形碗
第21図12	A	A区上層	磁器	碗蓋	肥前		18C後半	(10.2)	—	—	2.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図13	A	A区上層	磁器	碗蓋	肥前		18C後半	—	—	—	(2.2)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第21図14	A	A区上層	磁器	皿	肥前		18C後半～19C前半	(10.0)	—	(5.8)	2.4	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	口錆
第21図15	A	A区上層	磁器	皿				(12.8)	—	(7.2)	3.2	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	高台露胎、砂目
第21図16	A	A区上層	磁器	皿				—	—	(17.4)	1.4	施釉	施釉	精製土	良	灰黄白色	灰黄白色	高台露胎 高台内にハリ支え痕
第21図17	A	A区上層	磁器	皿	瀬戸美濃		近代(大正期)	(11.9)	—	5.5	2.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第22図1	A	A区上層	磁器	猪口	肥前		1780～1820年代	—	—	5.9	(2.0)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	蛇の目目形高台 そば猪口
第22図2	A	A区上層	磁器	猪口	不明		近代	5.5	—	2.5	3.1	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第22図3	A	A区上層	磁器	猪口	京焼系		19C	5.0	—	1.9	3.0	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	煎茶道具 内底刻印「金山」
第22図4	A	A区上層	磁器	段重			19C後半	10.8	—	9.9	2.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	型紙摺り
第22図5	A	A区上層	磁器	合子蓋	肥前		19C中頃	(5.6)	—	—	0.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第22図6	A	A区上層	磁器	皿	肥前		18C後半～19C	(8.3)	—	(2.7)	3.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	紅皿 内面鉄漿付着か
第22図7	A	A区上層	白磁	皿	肥前		18C後半～19C	4.9	—	1.5	1.5	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	菊花紅皿
第22図8	A	A区上層	白磁	皿	肥前		18C後半～19C	4.4	—	2.4	1.4	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	菊花紅皿
第22図9	A	A区上層	陶器	碗	京都系		18C後半～19C前半	(8.5)	—	(3.4)	6.2	施釉	施釉	精製土	—	浅黄色	浅黄色	
第22図10	A	A区上層	陶器	碗	福岡	小石原系か	18C後半～19C前半	(9.0)	—	(3.8)	4.0	施釉	施釉	F	—	灰オリーブ色～白色	灰オリーブ色～白色	
第22図11	A	A区上層	陶器	皿	福岡	小石原系	18C後半～19C前半	(9.4)	—	3.6	3.0	施釉	施釉	精製土	—	暗褐色 一部灰黄色	暗褐色 一部灰黄色	
第22図12	A	A区上層	陶器	皿	福岡	小石原系か	18C後半～19C	—	—	6.2	(2.4)	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	暗赤褐色	内面蛇ノ目軸割ぎ 重ね焼き跡あり
第22図13	A	A区上層	陶器	小壺	不明		不明	(10.8)	—	—	(7.5)	施釉	施釉	E	—	明緑白色	明緑白色～白色	緑釉 No.5と同一個体か
第22図14	A	A区上層	陶器	小壺	不明		不明	—	—	6.7	(2.8)	施釉	施釉	E	—	明緑白色	白色	緑釉 No.2と同一個体か
第22図15	A	A区上層	陶器	乗場	福岡? 関西?	小石原系か	18C後半～19C	(5.2)	—	4.6	5.0	施釉	施釉	精製土	—	暗褐色	暗褐色	
第22図16	A	A区上層	ガラス	壺	不明		近代	—	—	4.9	(3.5)	—	—	—	—	—	—	インク壺
第23図1	A	A区中層	磁器	碗	肥前		19C中頃～後半	(16.0)	—	(6.4)	6.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	焼継あり

第3表 出土遺物観察表 (3)

図番	区名	遺構名	種別	器種	産地	窯	年代	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
								口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第23図2	A	A区中層	磁器	碗蓋	肥前		1820～1860年代	(9.4)	—	—	2.7	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反蓋
第23図3	A	A区中層	陶器	瓶	九州	小石原系 or 小鹿田系	18C後半～19C前半	3.0	—	9.6	27.5	施釉	施釉	精製土	—	灰白色 一部青緑色	灰白色 一部青緑色	繻輪軸
第24図1	A	A区下層	磁器	碗	肥前			(10.6)	—	—	(4.8)	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	
第24図2	A	A区下層	磁器	碗	肥前			(10.2)	—	—	(4.1)	施釉	施釉	精製土	良	淡青白色	淡青白色	二次被熱 くらわんか碗
第24図3	A	A区下層	磁器	碗	肥前		18C後半～19C前半	(8.5)	—	(4.0)	6.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	湯呑み碗 金彩
第24図4	A	A区下層	磁器	碗蓋	肥前		1810～1860年代	(9.5)	—	—	3.0	施釉	施釉	精製土	—	—	—	色絵 墨弾き 端反蓋 銘「肥」 №48とセット
第24図5	A	A区下層	磁器	皿	肥前			—	—	(8.4)	(2.1)	施釉	施釉	精製土	良	灰色	灰色	内面、一部露胎 見込み蛇の目軸剥ぎ コシニヤク印刷の五弁花文 第24図6と同一個体?
第24図6	A	A区下層	磁器	皿	肥前			—	—	(8.4)	(1.8)	施釉	施釉	精製土	良	灰色	灰色	見込み蛇の目軸剥ぎ 第24図5と同一個体?
第24図7	A	A区下層	磁器	皿	肥前			(12.8)	—	—	(1.8)	施釉	施釉	精製土	良	淡青白色	淡青白色	二次被熱
第24図8	A	A区下層	磁器	皿	肥前		18C後半～19C前半	8.6	—	2.6	3.4	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	紅皿
第24図9	A	A区下層	磁器	鉢 or 狭口	肥前		18C後半～19C前半	6.7	—	3.7	5.1	施釉	施釉	精製土	—	瑠璃色	瑠璃色	瑠璃釉 金彩
第24図10	A	A区下層	陶器	壺	九州		18C後半～19C前半	(8.8)	—	—	(14.8)	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	灰褐色	
第24図11	A	A区下層	陶器	徳利	肥前		18C後半～19C前半	2.6	—	6.0	19.7	回転ナデ	回転ナデ	E	—	明赤褐色 ～にぶい赤褐色	明赤褐色 ～にぶい赤褐色	人形徳利(布袋)
第24図12	A	A区下層	陶器	蓋	九州	小鹿田か	18C後半	6.2	—	—	2.7	施釉	施釉	精製土	—	黒褐色	黒褐色	土瓶蓋
第24図13	A	A区下層	陶器	蓋	九州	小鹿田	18C後半～19C前半	6.2	—	—	2.8	施釉	施釉	精製土	—	暗赤褐色	暗赤褐色	土瓶蓋
第24図14	A	A区下層	陶器	蓋	九州	小鹿田	18C後半～19C前半	9.2	—	—	2.8	施釉	施釉	精製土	—	黒褐色	黒褐色	土瓶蓋
第24図15	A	A区下層	陶器	蓋	関西系		18C後半～19C	(13.8)	—	—	3.7	施釉	施釉	F	—	褐色	褐色	行平鉢蓋、飛びカンナ、イッ チン掛け、内面3ヶ所目跡あり
第25図1	A	A区下層	陶器	蓋	関西系		18C後半～19C前半	17.8	—	—	5.1	一部施釉	一部施釉	E	—	暗赤褐色	暗赤褐色	片口蓋
第25図2	A	A区下層	陶器	行平	関西系		18C後半～19C前半	18.5	—	—	(9.6)	施釉	施釉	精製土	—	暗褐色	暗褐色 にぶい橙褐色	飛びカンナ 把手に寿字彫刻
第25図3	A	A区下層	土師質土器	煨炉	不明		19C	(39.0)	—	(29.4)	(26.4)	丁寧なナデ・ ハケメ・カキメ	丁寧なナデ・ ハケメ・カキメ	E G	良	橙褐色	橙褐色	
第26図1	A	A区最下層	磁器	大皿	唐津		1590～1600年代	—	—	—	(2.1)	施釉	施釉	E F	—	灰色	灰色	鉄絵 絵唐津
第26図2	A	A区最下層	磁器	皿	肥前		17C	(12.8)	—	(5.6)	3.2	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第26図3	A	A区最下層	磁器	猪口	肥前		18C後半	4.4	—	3.8	5.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	色絵 金襴手
第26図4	A	A区最下層	青磁	碗	中国	龍泉系	14C～15C	—	—	(4.4)	(1.5)	施釉	施釉	精製土	—	灰オリーブ色 ～明オリーブ色	灰オリーブ色 ～明オリーブ色	
第26図5	A	A区最下層	土師質土器	小皿	—	—	—	—	—	(7.7)	(1.6)	ヨコナデ・ 糸切り	ヨコナデ	A C D E	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第26図6	A	A区最下層	土師質土器	小皿	—	—	—	—	—	(1.4)	—	糸切り	ヨコナデ	A C D E	良	明黄褐色	橙褐色	
第26図7	A	A区最下層	土師質土器	小皿	—	—	—	(7.8)	—	—	(1.1)	ヨコナデ・ 糸切り	ヨコナデ	A C D E	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第27図1	A	A区一括	磁器	碗	肥前		1810～1860年代	(11.1)	—	4.4	6.0	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反碗
第27図2	A	A区一括	磁器	碗	肥前		1820～1860年代	(10.4)	—	4.0	5.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	端反碗
第27図3	A	A区一括	磁器	碗	瀬戸美濃		19C前半～19C中頃	(8.8)	—	3.4	4.6	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	口跡 端反碗
第27図4	A	A区一括	磁器	碗	肥前系			(10.8)	—	5.0	4.5	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	見込み一部と高台露胎
第27図5	A	A区一括	磁器	碗	肥前系			8.1	—	3.4	5.6	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	
第27図6	A	A区一括	磁器	碗	肥前		1820～1860年代	6.7	—	3.2	5.1	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	丸碗
第27図7	A	A区一括	磁器	碗	肥前		1820～1860年代	(6.6)	—	2.8	4.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	丸碗
第27図8	A	A区一括	磁器	皿	肥前		18C後半～19C前半	(10.8)	—	(6.4)	2.8	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	輪花
第27図9	A	A区一括	磁器	皿	有田		19 c	(11.6)	—	7.4	2.0	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	高台露胎、砂目
第27図10	A	A区一括	磁器	碗?	肥前?			—	—	—	1.9	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	
第27図11	A	A区一括	磁器	大皿	肥前		19C前半～中頃	41.0	—	22.8	5.3	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	内底「大明成化年製」
第27図12	A	A区一括	磁器	蓋	肥前?		18世紀前半	9.4	—	—	2.8	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	丸碗 蓋ツマミ径3.2cm
第27図13	A	A区一括	磁器	蓋	肥前?			10.0	—	—	3.4	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	
第27図14	A	A区一括	磁器	合子蓋	肥前		19C前半～中頃	4.6	—	—	0.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	「肥後 渡辺 半処入 鳥居 園」
第27図15	A	A区一括	磁器	瓶	肥前		18C後半～19C前半	—	—	4.0	(3.3)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第27図16	A	A区一括	磁器	瓶	肥前		18C後半～19C	—	—	(4.5)	(11.9)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	お神酒徳利
第27図17	A	A区一括	白磁	水滴	肥前		18C後半～19C	長さ 12.7	幅 7.3	—	4.9	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第28図1	A	A区一括	陶器	皿	福岡	小石原系	18C後半～19C前半	—	—	(5.2)	(4.4)	施釉	施釉	精製土	—	灰褐色	灰褐色	見込み蛇ノ目軸剥ぎ

第4表 出土遺物観察表(4)

No.	区名	遺構名	種別	器種	産地	窯	年代	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
								口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第28図2	A	A区一括	陶器	播鉢	唐津系		18C後半～19C前半	(28.8)	-	10.4	11.0	回転ナデ・糸切り	回転ナデ・播目	精製土	-	暗赤灰色	暗赤灰色	
第28図3	A	A区一括	陶器	甕	九州	小鹿田か	18C後半～19C前半	(37.2)	-	-	(28.6)	施釉	口縁部のみ施釉	精製土	-	褐色 灰白色 黄褐色	黒褐色	
第28図4	A	A区一括	陶器	甕	九州	小鹿田か	18C後半～19C前半	-	-	15.2	(27.5)	施釉	露胎	精製土	-	褐色 灰白色 黄褐色	黒褐色	
第28図5	A	A区一括	陶器	乗場	福岡？ 関西？	小石原系か	19C	(4.6)	(6.2)	3.2	3.6	施釉	露胎	精製土	-	暗褐色		
第28図6	A	A区一括	瓦質土器	火鉢	不明		18C～19C	-	-	(19.4)	(22.7)	回転印文	ハケ目・指オサエ	精製土	-	灰黒色	灰黒色	茶道用 外面刻印あり
第28図7	A	A区一括	土師質土器	火鉢	不明		不明	(23.1)	-	-	(9.7)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	CE	良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第29図1	A	A区覆乱	磁器	碗	信楽系		18C後半～19C前半	(9.4)	-	3.8	5.6	施釉	施釉	精製土	-	灰オリーブ色	灰オリーブ色	
第29図2	A	A区覆乱	磁器	蓋	肥前			10.4	-	-	2.7	施釉	施釉	精製土	良	白色	白色	二次被熱 見込みに火炎文
第29図3	A	A区覆乱	磁器	碗蓋	肥前		18C後半	(9.8)	-	-	2.6	施釉	施釉	精製土	-	白色	白色	
第29図4	A	A区覆乱	磁器	蓋	肥前系			10.6	-	-	3.0	施釉	施釉	精製土	良	白色	白色	
第29図5	A	A区覆乱	磁器	皿	肥前			12.2	-	7.8	3.8	施釉	施釉	精製土	良	灰白色	灰白色	高台露胎
第29図6	A	A区覆乱	陶器	皿	福岡	小石原系	18C後半～19C	(12.5)	-	4.6	4.4	施釉	施釉	E F	-	オリーブ色 オリーブ黒色	オリーブ色 オリーブ黒色	見込み蛇ノ目輪剥ぎ
第29図7	A	A区覆乱	陶器	播鉢	関西系		18C後半～19C前半	(10.0)	-	-	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ・播目	精製土	-	赤褐色	赤褐色	焼結 ままごと道具 堺産播鉢を模倣
第29図8	A	A区覆乱	陶器	播鉢	関西系		18C後半～19C前半	-	-	(3.0)	(0.5)	回転ナデ	回転ナデ・播目	精製土	-	赤褐色	赤褐色	焼結 ままごと道具 堺産播鉢を模倣
第29図9	A	A区覆乱	土師質土器	蓋	関西系		18C	(6.6)	-	-	1.4	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	B	良	明赤褐色	明赤褐色	塩焼き壺蓋
第30図1	A	A区一括	瓦	瓦当	-	-	-	-	(1.5)	(7.8)	-	ナデ・巴文	ナデ	CE F	良	暗灰色	暗灰色	
第30図2	A	A区一括	瓦	丸瓦	-	-	-	-	(1.8)	(7.6)	-	ナデ	ヨコナデ	A E	良	暗灰色	暗灰色	
第30図3	A	A区一括	瓦	丸瓦	-	-	-	(11.6)	(9.6)	2.1	タテ方向のナデ・ヨコナデ・ナデ	布目痕	A	良	灰色	暗灰色		
第30図4	A	A区一括	瓦	丸瓦	-	-	-	(10.3)	(8.9)	1.9	ナデ	布目痕・コビキ痕・つり紐痕	F	良	暗灰色	暗灰色		
第30図5	A	A区覆乱	瓦	丸瓦	-	-	-	(10.6)	(6.7)	1.9	ナデ	布目痕・コビキ痕	A	良	褐色	にぶい黄褐色		
第31図1	A	2号土坑	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(9.9)	(9.3)	1.8	ナデ・面取り・巴文	ナデ	A C E	良	灰色	暗灰色		
第31図2	A	A区上層	瓦	軒丸瓦	-	-	-	(3.5)	(6.9)	-	ナデ・巴文	ナデ	A	良	暗灰色	暗灰色		
第31図3	A	A区上層	瓦	丸瓦	-	-	-	(11.5)	(7.6)	1.9	ナデ	布目痕	A C	良	暗灰色	暗灰色		
第31図4	A	A区最下層	瓦	丸瓦	-	-	-	(14.3)	(12.3)	2.0	ナデ・ヨコナデ	ケズリ・布目痕	A E	良	暗灰色	暗灰色		
第31図5	A	A区最下層	瓦	丸瓦	-	-	-	(9.0)	(7.4)	1.4	ナデ	ナデ	A C	良	暗灰色	暗灰色		
第31図6	A	A区一括	瓦	軒平瓦	-	-	-	(10.7)	(13.2)	1.8	ナデ・花・唐草文	ナデ・ヨコナデ	A E	良	暗灰色	暗灰色		
第31図7	A	A区一括	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(12.8)	(16.7)	1.9	ナデ・巴文・花・唐草文	ナデ	A F	良	暗灰色	暗灰色		
第31図8	A	A区一括	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(7.3)	(15.1)	1.6	ナデ・ミガキ・巴文・唐草文	ナデ	F	良	暗灰色	暗灰色		
第31図9	A	A区一括	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(6.9)	(10.7)	1.8	ナデ・巴文・唐草文	ナデ	F	良	暗灰色	暗灰色		
第31図10	A	A区一括	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(7.8)	(13.0)	1.9	ナデ・巴文・唐草文	ナデ	A	良	黒色	黒色		
第31図11	A	A区一括	瓦	瓦当付軒丸瓦	-	-	-	(5.8)	(9.1)	1.6	ナデ・巴文	ナデ	C F G	良	灰白色	暗灰色		
第31図12	A	A区一括	瓦	瓦当	-	-	-	(1.5)	(7.6)	-	ナデ・巴文	ナデ	A E F G	良	灰色	灰色		
第31図13	A	A区一括	瓦	瓦当	-	-	-	(1.5)	(8.2)	-	ナデ・巴文	ナデ	C D G	良	灰色	暗灰色		
第31図14	A	A区一括	瓦	瓦当	-	-	-	(1.5)	(8.3)	-	ナデ・巴文	ナデ	A C D E	良	褐色・暗灰色	褐色・暗灰色		
第32図1	A	A区上層	石製品	硯	-	-	-	長さ13.5	幅5.2	厚1.7	-	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	刻書あり「赤開聞」
第32図2	A	A区下層	石製品	硯	-	-	-	長さ(10.3)	幅6.1	厚2.0	-	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	刻書あり「赤開聞」
第32図3	A	A区下層	石製品	硯	-	-	-	長さ(10.7)	幅6.7	厚2.2	-	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	
第35図1	B	B区池	磁器	碗	肥前		19C後半	-	-	3.8	(2.5)	施釉	施釉	精製土	-	白色	白色	型紙摺り
第35図2	C	C区一括	磁器	碗	肥前		18C後半	-	-	4.6	(3.0)	施釉	施釉	精製土	-	白色	白色	
第35図3	C	C区一括	磁器	鉢	肥前		18C後半～19C前半	-	-	8.4	(4.0)	施釉	施釉	精製土	-	白色	白色	
第35図4	C	C区一括	陶器	碗	関西系か		18C後半～19C	(7.8)	-	5.2	6.0	施釉	施釉	精製土	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第35図5	C	C区一括	陶器	蓋	関西系		18C後半～19C	7.0	-	-	2.0	施釉	施釉	E	-	灰白色	灰白色	土瓶蓋
第35図6	C	C区一括	土師質土器	鉢	不明		不明	-	-	-	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	E F	-	灰白色	灰白色	火鉢 スタンプ文

法量の単位はcm。() 書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他



調査区周辺空中写真（南から）（白丸が調査地）



調査区周辺空中写真（西から）



1次調査A区垂直写真（上が西）



2次調査区垂直写真（上が西）



① 1~3号建物発掘状況（真上から）



② 1号建物穴蔵発掘状況



③ 1号建物玉石墨書き



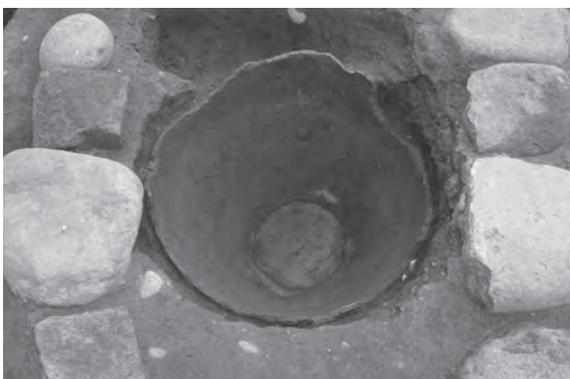
④ 3号建物発掘状況



⑤ 4号建物発掘状況（北西から）



⑥ 4号建物発掘状況（西から）



⑦ 4号建物便槽発掘状況



⑧ 4号建物便槽発掘状況



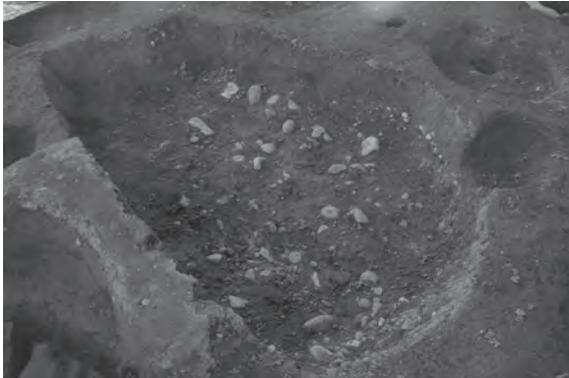
① 2号玉石列発掘状況 (南西から)



①カマド発掘状況 (北東から)



③カマド発掘状況 (北西から)



④ 1号土坑発掘状況 (北東から)



⑤ 2号土坑発掘状況 (西から)



⑥ 3号土坑発掘状況 (西から)



⑦ 4・5号土坑発掘状況 (南東から)



① 6号土坑発掘状況（北西から）



② A区遺物出土状況



③ A区遺物出土状況



④ A区遺物出土状況



⑤ B区全景（北東から）



⑥ B区池発掘状況（南西から）



⑦ C区全景（北東から）



⑧ C区全景（西から）



6-9



16-11



20-7



22-16



24-12



25-3



26-4



26-4



26-5



26-6



26-7



28-2



28-6



28-7



29-7,8



29-9



30-1



30-2



30-3



30-4



30-5



31-1



31-2



31-3



31-4



31-5



31-6



31-7



31-8

写真图版 8



31-9



31-10



31-11



31-12



31-13



31-14



32-1



32-2



32-3



32-5



32-6



32-7



35-5



35-6



35-5

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうかまちいせき
書名	城下町遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書／市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第124集／17
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 0973(24)7171
発行年月日	2016年(平成28年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうかまちいせき 城下町遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざまだ 大字豆田	44204-6	204112	33° 18' 31"	130° 56' 1"	1次調査 20110516 ～ 20111013 2次調査 20121031 ～ 20130208	1次調査 312㎡ A区250㎡ B区24㎡ C区38㎡ 2次調査 162㎡ 内、下層87㎡	記録保存 及び 一部保存 目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城下町遺跡	集落	近世	建物4、玉石列2 カマド1、土坑7 ピット多数	陶磁器 瓦 硯	江戸時代後期の豆田町の町年寄・中村氏の居宅跡。

要 約	<p>遺跡は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている日田市豆田町に所在する。調査では18世紀後半頃に建てられた建物、18世紀後半より前のカマドや土坑などが確認された。建物については、河原石を利用した玉石を礎石とする構造的な特徴を把握することができた。さらにこれらの建物が幕末の絵図に描かれた豆田町の町年寄・中村平太夫の居宅であることが判明した。建物規模の面からみると、間口が4間～7間と、当時の豆田町での一般の住宅の間口3間ほどであったのに比べ、町年寄の家が格段に大きかったことが確認された。</p> <p>このほか、下層の調査では、中世の遺物が出土しており、豆田町の成立以前の生活痕跡を確認できたことも成果の一つである。</p>
-----	--

城下町遺跡

2016年 3月31日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 株式会社インデバイス
877-0076 大分県日田市亀川町848-1

